



ief im Böhmer Walde, wo-
von jetzt nur ein Schatten
übrig ist, wohnte vorzeiten,
da er sich noch weit und breit ins Land
erstreckte, ein geistiges Völklein, lichtscheu
und luftig, auch unkörperlich, feiner ge-
naturt als die aus fettem Ton geformte Menschheit, und darum

今ではもう痕跡しか残っていない
ボヘミア森の奥深くに、これがまだ
見渡す限り茫茫と国中に広がって
いた往古、可憐な精霊族が棲んでいた。
光を厭い、大気のように軽く、肉体
は持たず、どっしりした粘土から捏
ね上げられた人間より繊細な性質だ
ったから、粗野な触覚には感知され
ないのだが、細やかな感覚の持ち主

ト事跡」に拠る）
（ヨハンネス・ドゥブラヴィウス著『ボヘミア史』および枢機卿アエネアス・シルヴィウス著『ぼへみあ人ノ發祥

リブツサ

ヨーハン・カール・アウグスト・ムゼーウス 著
鈴木 満 訳・注・解題

だと月明かりで半ば見えるし、文人たちには樹の精として、古代の吟遊詩人たちには妖精の名でよく知られている。想像もつかぬ大昔から彼らはここでだれにも邪魔されずに暮らして来たが、突然森に喧しい戦の騒乱が沸き起こった。ウンガーラント公チエフがスラヴ人の同勢を引き連れ、この荒涼とした地域に新たな居住地を見つけようと、山地を越えて侵入したのである。年古りた檜、巖、峡谷、洞窟、さてはまた、池や沼地の葦などを住まいとしていた美しい女たちは物の具の響きや軍馬の嘶きのために逃げ出した。権勢ある妖精王ですら騒音にはうんざりして、その宮居をもっと辺鄙な曠野に移した。ただある妖精だけが、お気に入り樹の樹と別れる決心がつかず、土地を開墾するために森がそこで伐採されるようになると、新参者たちの暴力から自分の樹を守ろう、と独り勇気を出して、高く聳え立つ梢を居場所を選んだ。

公の近侍の中にクロクスという名の年若い盾持ちがいた。度胸と英気に満ち溢れ、活発ですらりとした体つきで、雅な知識礼節も心得ている。君侯の愛馬たちの世話を委ねられていて、森の奥の草原まで駆り立てて行くことがあった。時時彼は例の妖精が棲んでいる檜の下に憩うのだったが、こちらはこの余所者がお気に召して、夜彼が下の樹の根元でまどろんだりすると、快い夢の数数をその耳に囁き、次の日に起こるべきことを意味深長な映像を見せて告知するのだった。あるいは、馬のどれか一頭が森に彷徨い込んでしまい、この番人がそれを探し出す痕跡が見つからぬまま、困惑して寝入ったりすると、彼は夢の中で迷子の駒が草を食べている場所へ通じる隠された路のいろいな目印を見るのだった。

新たな入植者たちが拡がれば拡がるほど、彼らはこの妖精の住処に迫って来た。持ち合わせている予知能力のお蔭で、もうすぐ自分の生命の樹を斧が脅かすことになるだろう、と悟った彼女は、親しい客人にこうした苦悩を打ち明けよう、と心を決めた。ある月の明るく夏のこと、クロクスはいつもより遅く馬の群を馬囲いへと追い込み、そ



れから例の高く聳え立つ榿の樹の下の自分の宿营地へと急いだ。そこへの道は魚のたくさんいる池の周りを巡っていて、池の白銀の波に黄金の三日月が円錐形に姿を映していた。そうしてこのきらきら輝いている水面の向こう、対岸の榿の辺りに、彼は涼しい岸辺を逍遙しているように思われる女性を見かけた。この姿は若い戦士にはなんともいぶかしかった。あの乙女は、と青年は心中考えた、こんな寂しいところに、こんな黄昏時に、どこから独りでやって来たんだらう、と。でもこうした異常なできごとは、若い者にとっては怖いというより、もっとよく事の次第を調べて

やれ、との好奇心をそそる性格のもの。彼は注意を引きつけている姿から目を逸らさず、足取りを二倍に速めて、間もなく初めそれに気づいた場所である榿の樹の下に行きついた。

来てみると自分が見たものは肉体というより影のように思われ、なんとも不思議で付んでいと、肌にぞうっと冷たい戦慄が走った。けれども彼は柔らかな声がこんな言葉を囁くのを耳にしたのである。「こなたへまいられよ、余所の方、怖がることはありません。わらわはこの森の妖精で、この榿の樹に棲まう者。生い茂った大枝の下でそなたはたびたび安らいましたな。わらわはそなたを寝かしつけ、甘い楽しい夢の数を見せ、その身に起こることを知らせ、群の母馬とか子馬などが迷ってしまった時にはいつも、どこで見つかるか、その場所を教えてあげまいらせた。こうした好意のお

返しにわらわの願いを叶えてたもれ。そなたを照りつける日差しや雨から何度も庇ってきたこの樹の守護者になって、この森をしたたかな目に遭わせているそなたの同胞たちの酷い斧を防ぎ、この尊い幹を損なわなないようにして欲しいのじゃ」。

この穏やかな話で再び勇気を取り戻した若い戦士はこう答えた。「そなたが女神様にせよ死すべき定めの人の子にせよ、お望みの趣きをやつがれに申されい。できる限りそれをやり遂げます。したが、やつがれは我が民族の中でも取るに足らない身、ご主人の公の下僕でござる。今日か明日にでもご主人がやつがれに向かつて、どこそこで放牧せよ、と言いつけたら、遠く離れたこの森でどうやってそなたの樹を守れよう。けれどそなたが命じらるるなら、やつがれは従者を辞めて、そなたの檜の樹の木陰に住み、生涯これを守護いたす」。「そうしてたもれ」と妖精は言った。「後悔はさせませぬぞえ」。こう告げると姿を消し、音高い宵の微風が梢の高みを吹き抜けたに他ならぬかのようにながざわめき、葉がそよいだ。クロクスは、自分の前に出現したこの世のものとも思えぬ姿にすっかり驚いてまだ暫く立ちすくんでいた。ずんぐりしたスラヴの少女のうちでは、こういったほっそりした体つきと素晴らしい立ち居振る舞いの女性にお目にかかったためしはなかったのである。とうとう彼は眠気がささぬまま、柔らかな苔の上に大の字になった。暁の薄明にはっと目覚めた彼は甘い感覚でぼうっとしていた。これは生まれつき目が見えなかった人の開いた目に差し込んだ光のように不慣れで新鮮な感覚だった。朝まだき公の陣営にすっ飛んで行った彼は暇を乞い、戦道具を取り纏めると、頭には燃えるような熱狂を詰め込み、背中には重荷を背負って、楽しい森の隠棲場所へ早足で引き返した。

そうこうする内彼の留守中にこの民族のある職人の親方が、職業は粉挽きだったが、この真っ直ぐな檜の樹の幹を水車の輪軸にもってこいの良材だと鑑定、徒弟たちと一緒に伐り倒しにやって来ていたのである。がつがつしている



横挽き鋸が鋼鉄の歯で住処の土台を齧り始めた時、妖精は恐れ慄いて嘆息した。彼女は樹の頂きの高みから、忠実な戦士はいずこ、と辺りに目を配っていた。けれど、炯眼けんがんなのにどこにも青年の姿を発見できなかったし、茫然自失したため一族に授けられている予知能力が今は発動されなかつたので、アスクレピオスの息子たちが、死が彼ら自身の扉を叩く時、その名高い予兆判断にお伺いを立てることができるようには、待ち構える運命を解明し得なかつた。

しかしクロクスは今にもここに着くところだったのだ。そうしてこの悲惨な破局の現場にごく近くに來ると、ぎいぎいと軋きる鋸の音が彼の耳に入った。森の中のこの轟音に彼は良からぬことを感じ、飛ぶような足取りで急ぐと、自分が庇護を引き受けた樹が恐ろしいことに今にも伐り倒されそうなのが見えた。彼は即刻狂ったように木を伐っている男ども目掛けて槍ときらめく剣を手に襲い掛かり、仕事から追いつた。この連中、山の魔物が出て来たと思ひ込み、周章狼狽して逃げ散つたのである。幸いなことに樹が蒙うむつた傷はまだ癒えるもので、瘢痕うきはものの数夏で消えた。

新たな到来者がこの場所をこれからの住まいに持って来いと定め、柵で囲んだ小さい庭を造るため空き地を歩測し、敬虔な修道士が精神

的な恋の対象に選んだ暦の聖女よりずっと現実性を持たない、影のような伴侶とともに人間社会から隔絶して日を送ろう、ともくろんでいる隠れ家の構図をとつくりと考案するようになる、仕事が終わった夕べには、妖精が池の岸辺に現れて、優美な物腰でこんな風に彼に話しかけるのだった。「余所のお方、あなたの同胞たちの荒荒しい腕から、この樹が伐り倒されるのを防いでくださって 忝かたじけない。この樹とは私の命が姉妹の契りを結んでいるのです。かようなことを申すのは、母なる自然は、わらわの一族にさまざまの力や才能を授けてくれましたが、一族の命の定めをこの樫の樹が成長し生き永らえるのと齊ひとしくしたことを、あなたに知って欲しいから。我らのお蔭でこの数数の森の女王はその他の下下の木たちの上に高貴な頭をぬきんでいるのですし、我らがこの樹の樹液が幹や大枝を循環するのを促進してあげるので、突風と闘う力を持ち得て、なにもかも破壊してしまう長い数世紀の時に抗あむかうことができるのです。それに対してこれまた同じように、我らの命はこの樹の命と結ばれております。命の同胞である我らと運命を分かち合った樫が老いれば、わらわたちも樫とともに老います。そして死ねば、我らも消滅し、死すべき定めの子のように一種の死の眠りを眠るのです。万物の永遠の輪廻りんねを通じて、偶然かあるいは隠された自然の指図かがわらわたちという存在をなにかの新芽と一つに合わせてくれ、その新芽が活気づける我らの駆動力によって開いて枝葉を茂らせ、長い時が経ってから巨木に成り、我らに改めて命を授けてくれるまでね。これで分かったでしょう。あなたの援助がわらわにどんな尽力をしてくれたことになるのか、どれほどの感謝がそれに相応ふさわしいか。あなたの気高い行いの報酬を要求して下さい。あなたの心の願いをわらわに打ち明けて下さい。即座に叶えて進ぜましようぞ」。

クロクスは黙っていた。魅惑的な妖精の姿は、僅かしか理解できなかったその言葉よりもずっと強い印象を彼に与えていた。妖精は相手が困惑しているのを見て取り、そこから引き出すため、池の岸辺の一本の枯れた葦を手にする

と、これを三つに折って、こう言った。「この三本の茎のうち一本を選ばれよ。選ばずといずれかを取つてもよい。最初には榮譽と名声が、次には富とそれの賢い愉しみかたが、三本目には恋の幸せが、そなたのために封じ込まれております」。若者は目を伏せて、こう答えた。「天の娘御、そなたが、この身の心の願いを叶えてやろう、と思つておられるなら、お分かりくだされい。それは差し出しておられるその三つの茎の中には入つてはおりませぬ。やつがれはもつと大きな報酬が欲しい。榮譽などは高慢を燃え上がらせる火口に過ぎぬのでは。富などは貪欲が生えてくる根っこに過ぎぬのでは。恋などは心の高潔な自由を押し潰す情熱への陥穽に過ぎぬのでは。叶えて戴きたいお願いは、そなたの檜の木陰で軍旅に疲れた体を憩わせること、そなたの甘い唇から知恵の教えを聴き、未来の秘密の謎を解くこと」。「そなたの要求は」と妖精は言葉返して「大きいのですね。でも、わらわのためにしてくれたことはささいなものではありません。ですから、そなたの頼みの通りにいたしましょう。そなたの肉体の目を蔽つている眼帯を取つてあげましょう。隠された叡智の秘密を覗けるように。さあ、果実を味わい、皮をお捨てなさい。賢者は敬われる人ゆえ。それから豊かといえるのは賢者だけ。必要なもの以上は欲しがりませぬから。そして賢者は恋の神酒ネクテルを不浄な唇でそれを有毒にすることなしに賞味するもの」。こう言い終わると樹の精はもう一度三本の葦の茎をクロスに差し出し、彼と別れた。

若い隠者は、妖精から与えられたもてなしにこの上もなく満足して、檜の樹の下に自分の苔の寝床をしつらえた。眼りが武装兵のように彼を不意打ちにし、朗らかな暁の夢がいくつも彼の頭のとっぺんを囲んで踊り回り、幸せな予感の霧で彼の空想を養つた。目を覚ますと心楽しく日課の仕事に取り掛かり、快適な隠者の小屋を建て、庭に穴を掘ると、薔薇や百合、それからその他の芳香を放つ花や香草の数数、またそれに劣らず甘藍とか種種の野菜類を実の生る果樹とともに植えつけた。妖精は黄昏時ともなると必ず彼の許にやって来て、彼の勤勉の成果を喜び、彼とともに

手に手を取って葦の生い茂る池のほとりをあちこち散策した。そして、そよぐ葦は、風が間を吹き抜けると、笛のよ
うな音を立てて仲の良い二人に美しい旋律の夕べの挨拶を送るのだった。妖精は注意深く耳を傾けている弟子に自然
の神秘を解き示し、物事の根源と本質を授業、それらの自然の属性と魔術の面での特性を教え、荒削りの戦士を思想
家・哲人に造り変えた。

麗しい影の姿との交わりによって年少の男の感性と触覚が精緻せいちになるにつれて、妖精のあえかな輪郭が濃密になり、
安定を増した。その胸は温かみと生気を帯び、褐色がかつた目にはちらちらと火が燃え、やがて彼女は年若な少女の
姿とともに娘盛りの五感をもその身に抱いた様子だった。まどろんでいる五感を呼び覚ますには全くお詛あつらえ向きの
多情多感な一刻ひとときの逢瀬おうせは当然の効果を挙げた。そもその馴れ初めからの数度と月の満ち欠けを経ぬうち、クロ
クスはほっと吐息をつくようになり、三本目の葦の茎が約束した愛の幸せに胸を満たされ、恋の陥穽かんせいに落ちて心の自
由を失ったことを後悔しなかった。情愛深い兩人の縁結びは二人っきりの秘め事だったが、どんちゃん騒ぎの華燭の
典同様楽しく行われ、やがて口を利くことのできる報われた愛のあかしにも恵まれた。妖精は背の君に同時に生まれ
た三人の娘を贈ったのである。そして我がもう一つの半身の実り多さにびっくりした父親は、初めて抱っこをした時
にこの子たちをこう名づけた。二人の双子の姉妹より早く高らかに産声を挙げた娘をベラ、次に産まれたのをテルバ、
末っ子をリブツサと。

二

どの子も容姿の美しさという点では精霊15に似つかわしかった。そして、母親のように繊細な素材で形作られてはい
なかったが、それでも体質は父親の粗野な人間の形態よりは精妙だった。その上子どもの脆弱せいじやくさとはことん無縁



Alle glichen den Genien an Schönheit der Gestalt, und ob sie gleich nicht aus so zartem Stoff gebauet waren als die Mutter, so war doch ihre körperliche Beschaffenheit feiner als die vergrößerte irdene Form des Vaters; dabei waren sie von allen Infirmitäten der Kindheit

で、おむつかぶれができることもなかったし、菌が生える時も癩癩性の瘰癧など起こさず、便秘でお腹が張って泣き喚くこともせず、佝僂病に襲われもせず、痘瘡にも罹らず、それゆえ痘痕もできず、目脂目やら内斜視やらの心配もせずに済んだ。その上あんよはお上手の紐も不要だった。というのは生後九日でもう山鶉のように達者に歩いたからである。そして成長するにつれ、隠されている事物を察知したり、未来のできごとを予知したりする母親の全ての才能が身に備わっていることが明らかになった。

クロクスは時間の助けを借りてこのような秘密に同じく通曉するようになった。狼が家畜の群を森の中で散り散りにしてしまい、牧人たちがいなくなった羊や牛やらを探すたび、木樵が大斧や手斧を失くしてしまつたが、彼らは賢者クロクスに相談しに来るのだった。すると彼は行方不明のものをどこで探せばよいか教えてやつた。邪な隣人が共有の財産の何かを盗んだり、夜近所の者の家畜囲いや住まいに侵入して強盗を働いたり、家の主人を殺害したりしても、だれが犯人なのかまるで分からない場合、賢者クロクスにお伺いを立てに行くのだった。すると彼は共有地に村人一同を集め、皆に輪を作るように命じ、それからその真ん中に入り、例の嘘をつかない節を回す。これは決してしくじることなく悪者を明らかにするのだった。こうして彼の名声は全ポヘミア国に広がり、問題や大切な用事を

抱えている人間は、案件がどうなるのかこの賢い男に相談しにやって来た。体に障害のある人たちや病者たちも治療や助けを彼に求めた。虚弱な家畜すら彼の許に連れて来られた。すると彼はそうしたことにちやんと心得があつて、評判高いシールバハの聖マルティンのように、病気の牝牛どもを自分の影によつて健やかにしてやつた。こんな具合で彼のところに参集する民衆の数は日に日に増えるばかり、さながらデルフォイなるアポロン神の鼎かなえ¹⁹がボヘミア森に移されたかのよう。そうしてクロクスは報酬も利得も無しに相談に来る者たちに回答を与え、病人や障害者を癒したのだが、彼の神秘に満ちた叡智という宝はたつぷりと利子を生み、彼に莫大な儲けをもたらした。民衆は捧げ物、贈り物を携えて彼の許に殺到、善意のあかしであやうく彼を押し潰さんばかりだった。彼はまずラベ河21の川砂から黄金を洗い取る秘法を公にし、全ての砂金採りから十分の一税を受け取った。それによつて彼の土地財産は殖え、彼は堅固な城館や宮殿を建て、膨大な家畜の群を幾つも持ち、実り豊かな莊園、畑、森林を保有、気前の良い妖精が前兆として二番目の葦の茎に封じ込んでおいた富は知らず知らずのうちに全て彼に帰していたわけ。

ある気持ちの良い夏の宵のこと、クロクスが騎乗の部下たちとともに、要請に応じて二つの村落の境界紛争を調停しに出かけた耕牧地への遠出から帰つて来ると、妻が、初めて自分の前に姿を現したあの葦の池の岸辺に佇んでいるのが目に入った。彼女が手招きしたので、彼は従者たちを引き取らせ、妻を抱き締め、急にだ。彼女はいつもの通り優しく愛情に溢れて夫を迎えたが、悲しげに打ち沈んでいた。目からこぼれる澄んだ清らかな涙はなんともかそけくはかないので、滴り落ちる際に微風ががつがつと吸われてしまい、地面には届かなかつた。クロクスはこの有様にはつとさせられた。これまで妻の目はいつも朗らかに若若しい喜びに輝いていたのだから。「どうしたの、可愛いそなた」と彼は言った。「良くないことが起こるのか、と不安で胸がかきむしられる。さあさあ、いったいどうして泣いているの」。妖精は溜め息をつくくと、憂わしげに頭を彼の肩にもたせかけて、こう告げるのだった。「大事なあなた、

ご不在中に私、運命の書で読みましたの、私の命の樹に恐ろしい悲運が迫っているのです。私はあなたと永久とこしえにお別れたさねばなりません。私と一緒に館にいらして。ちいちゃなあの子たちを祝福します。だって今日からあなたは私に二度と会えないでしょうもの。「ああ、いとしいひと」とクロクスは応じて「そんな悲しいことは考えないで。おくれ。どんな不幸がそなたの樹に襲いかかれよう。幹も根も堅固ではないか。葉と実をどっさり付けて一杯に広がっているあの大枝の様子をごらん。梢ときたら雲間まで延びていてはいないか。この腕かみこが動く限り、あの樹の幹をあえて傷つけようとするいかなる非道な者からも守ってみせようぞ」。「死すべき定めの人の子の身に叶う守護は無力なもの」と彼女は返した。「蟻は蟻から、蚊は蚊から、哀れな地虫の人間は哀れな地虫の人間からの攻撃を防げるだけです。でも、あなたがたの中で一番強い者として自然の諸力に対して、あるいは、変えることのできない運命の決定に対して、何ができません。地上の王たちにできるのは、彼らが砦とか城とか呼んでいる小さな土くれの山を転がすのが精。けれどほんのかすかな微風だって彼らの権勢を鼻で喰くい、そよぎたいところでそよぎ、王たちの命令など歯牙にも掛けません。あなたは以前この櫛の樹を人間の暴力から庇かばってくれました。でも突風からも防げましょうか。それが枝の葉を散らし始めた時。あるいはもしかして身を潜めた虫が樹の髓髄に食い込みでもしたら、引っ張り出して踏み潰つぶすことができますか」。

こうした会話を交わすうち仲の良い夫婦は館に入った。ほっそりした少女たちは、お母様の宵の訪問の時いつもするように、嬉しそくにぴよんぴよん飛び跳ねてお迎えに来、日課をちゃんとやっています、とご報告、自分たちの器用な勤勉さの証拠として刺繍や縫い物を持ち出して見せた。だが、今回は家庭の幸福のひとつ時はみじめなものだった。娘らはすぐ、父親の顔に深い苦悩が刻まれているのに気づき、母親の涙を見て、その理由をあえて聴かずとも、もろともに悲しみに浸った。母親は子どもたちにたくさんの賢明な教えやりっぱな訓戒を与えたが、その話は白鳥22の唄に



似ていて、あたかもこの世を去ろうとしているかのような感じがあった。彼女は更に暁の明星が昇るまで愛する家族の許で過ごしたが、それから憂わしげな優しさを籠めて夫と子どもたちを抱擁し、明け方になるといつものように秘密の小さな扉を抜け、自分の樹に戻って行った。愛する者たちを恐ろしい不安に慄くままにして。

太陽が昇ると自然はしんと耳を澄ませて静まり返っていたが、間もなく陰鬱な黒雲が再び太陽を隠してしまった。じつとりと蒸し暑い日になり、辺り全体がびりびりと電気を帯びていた。遠雷が轟きながら森を越えて来て、何百という罅ひびが曲がりくねった谷谷にその身の毛のよだつような響きを反復した。正午頃ぎざぎざの稲妻が樅の樹にくねり落ち、一瞬のうちに圧倒的な力で幹と大枝を木こっ端微塵はみじんに撃ち砕いたので、かけらは遠く森中に飛び散った。かねてこのことを予告されていた父クロクスは衣装を引き裂き、外に出て、三人の息女とともに妻の命の樹の死を哀悼し、その破片を拾い集め、大切に保管して貴重な遺品とした。妖精はというとその日からもはや姿が見られなかった。

数年後たおやかな姫たちは成長し、乙女らしく美しい容姿はほころびかけた蕾の薔薇のように花開き、その美貌の評判は全土に広まった。この民族の最も高貴な若殿ばらが我も我もとやってくる、心に懸かるさまざまな問題を父クロクスに申し述べ、助言を仰ぐのだった。しかし実のところこれは見せ

かけの口実に過ぎず、志すのは麗しい娘たちの方だったのであって、ひと目なりとも見たいもの、とのもくろみからお嬢さんがたにこっそり近づこうとする時、よく若い連中がその父親たちのところで用事を探したがるでしょう、あんな具合にね。三人姉妹はとても仲良くのびのびと暮らしており、その能力はまだ少ししか知られていなかった。予知の才は等しく授かっており、彼女たちが話すことは、意識していなかったのだが託宣だった。しかし間もなく彼女たちの虚栄心が阿諛追従^{あゆつじよう}で目を覚まし、言葉にこだわる連中はこの子たちの口から漏れる片言隻語をとつつかまえて、恋煩い^{せいら}の男どもは身振りの一つ一つを解釈、ほんのちらりの微笑^{ほほえみ}も見逃さず、視線がどこへ向くか情報収集し、多かれ少なかれ都合の良い前兆をそれから引き出し、自分たちの運命をそれで推測しているのだ、と思ひ込んだもの。そういう次第で、恋の道で目を占いの対象にして幸運の星やら不吉な星やらを判断するのは、この時代から恋人たちの習慣になったのである。虚栄が乙女心に潜り込むやいなや、その忠実なお仲間の傲慢が戸口の外にやって来た。一緒にいるのは取り巻きの性質^たの悪いごろつきども、自己愛、自慢、利己心、我侷^{まご}といった面面。こいつらも打ち揃^{まろ}って中へ忍び入る。姉たち二人はいろいろな術において末の妹を凌^{しの}ごう、と熱心に努めた。そして、妹の肉体的魅力が自分たちより立ち勝っているのを心中ひそかに妬んでいた。彼女たちは皆極めて美しかったのだが、リブツサは三人の中で最も綺麗だったのだ。ペラ姫はとりわけ薬草学に専念した。昔むかしのメディア姫^{メディア}のように。彼女は薬草の秘密の効力の数数に通じていて、それから効き目のある毒と解毒剤を作り出すことができた。また、目に見えないもろもろの力のために芳香粉²⁵と悪臭粉をこしらえる術も心得ていた。彼女の燻^くし鍋が煙を立てると、彼女は太陰^{たいいん}の彼方の測り知れないエーテル界²⁵から精霊たちを召喚し、精霊たちはその繊細な器官でこの甘美な蒸気を吸い込むために、彼女の思うままになるのだった。しかし、もし悪臭粉を燻^くし鍋^{かま}に撒けば、彼女はツイヒムやオヒム²⁶だつて砂漠から燻^くし出せたことだろう。

テルバ姫はキルケの²⁷ように聡^{さと}く、四大²⁸に命令し、嵐や旋風、雹や雷雨を起こし、大地の臟腑^{ぼんぷ}を震撼^{しんかん}させ、場合によっては大地を転覆させることさえ可能な力を持つ、ありとあらゆる呪文を考案することができた。彼女が民衆を驚かせるこれらの術を用いるのは、女神のように崇められたり畏^{おそ}えられたりするため。そして事実彼女は人間の我侷勝手に従って、天候を賢い自然よりもずっと快適にするすべもわきまえていた。二人の兄弟が喧嘩していた。彼らの希望が一致することがなかったからである。一人は農夫で、蒔^まいた種が育ち実るよう、しょっちゅう雨を欲しがった。もう片方は陶器^{すえもの}造りで、粘土で捏^こね上げた容器を乾かすため、いつも日照りだといひ、と願っていた。雨だと滅茶滅茶にされてしまうのである。さて、天は決して彼らの氣に入るようにはならなかったから、ある日二人はたつぷり捧げ物を用意して賢明なクロクスの住まいに出かけ、テルバに自分たちの問題を申し立てた。妖精の娘は自然の慈悲深いやりくり配分に抗議する兄弟の猛烈な文句を聴いて微笑み、両方の言い分を満足させてやった。農民の種の上には雨を降らせ、陶工の干し場には太陽を輝かせたのである。こうした魔法によって姉妹二人は大層な評判と莫大な富を得た。なにしろ見返りや礼なしでは腕を振るうことはなかったから。そして財宝を用いて館や別邸をいくつも建て、数数の素晴らしい遊苑を造り、飽くことなく饗宴や遊びごとに耽り、彼女らの愛を求める求婚者たちをたぶらかしたり、からかったりしていた。

リブツサは姉たちのような高慢^{うぬぼ}で自惚^{おぼ}れた性格は持ち合わせていなかった。自然の秘密に分け入り、その隠された力を使う天分は同じく授かっていたが、母親の遺産である不思議な才能の自分の持ち分に満足し、それをもっと膨らませたり、それを種に暴利を貪^あったりはしなかった。彼女の見栄^{みえ}は精^{せい}で自分の美しい容姿を意識するに留まり、富を欲しがることはなく、姉たちのように崇められたり畏^{おそ}えられたりすることも望まなかった。姉様がたが田舎の邸でいとも賑やかに騒ぎ回り、陽気な楽しみごとを慌^{あわ}ただしくとつかえひつかえし、ポヘミアの騎士階級の精華ともいう



べき男たちを凱旋戦車に繋いでいる時、彼女はうちのお父様の住まいでおとなしくしていて、家政を執り行い、相談を持ちかける人人に答を示し、貧乏人や傷病者を優しく援助してやるのだったが、こうしたこと全てが善意からのもので無償だった（1）。彼女の氣立ては穏やかで慎ましく、品行は高貴な乙女の一人に相応しく方正で堅固。なるほど、自分の美貌が男性たちの心に勝利を収めるのを内心嬉しがり、切なく恋い焦がれる崇拜者たちの吐息や甘いささめごとをその魅力に対する当然の貢ぎ物として嘉納してはいたが、しかしながら彼女に恋について一言でも語ったり、あるいはあえて求婚したりすることはだれにも許されなかった。もつとも悪戯者の愛神はつれない女性^{アモール}がたにその

権利を行使するのが一番好きで、大廈高樓^{たいかこうろう}を炎上させようともくろむ折には、しばしば賤^{しず}が伏せ屋の藁^{わら}葺き屋根に燃える炬火^{たきま}を放り投げる。

森の奥深くにチェフの徒党の軍勢とともにこの国にやって来た一人の年老いた騎士が棲みついて、曠野を開墾し、農場を造っていた。ここで余生を安穩に過ごし、耕作の収益で生計を立てよう、と考えたのである。ところが境界を接する横暴な隣人が騎士の所有地を我が物にし、彼をそこから追い出した。ある親切な同郷人が彼を引き取り、その家で雨露を凌^{しの}がせた。この気の毒な老人には一人の息子があって、唯一の慰めであり、老後の支えだった。彼は勇



若者は出発し、まずベラの宮殿に到着した。これは女神の住まう神殿のような見かけだった。彼は扉を叩き、中に入れてくれるよう頼んだ。しかし門番はこの余所者が空手で現れたのを見て、物乞い扱いにして追い払い、扉を閉めた。彼は悄然として立ち去り、妹のテルバの住まいにやって来た。扉を叩いて謁見してくれるよう懇請すると、門番が小窓のところへ来て、こう言った。「あなたが財布に黄金を入れていて、それをわしの女主人に差し上げられるんなら、ご主人様は、あなたの運命を告げてくれる立派な予言を何かしてくださいさるだろうぜ。でなけりゃ、行って、そいつをラベの岸辺で集めるんだな。樹がつけてる葉っぱくらい、穀物の束がつけてる穂くらい、鳥がつけてる羽根く

ましい若者だったが、老父を養うのに獵槍一本と使い慣れた拳以外に何一つ持たぬ。非道なナバル(30)の略奪は彼を復讐に駆り立て、暴力を駆逐するのに暴力を用いようと準備をした。しかし、息子の命を危険に晒したくない慎重な父親の言いつけで高潔な青年は武装を解いた。だが彼は将来ともにこの当初の計画を思い留まるつもりはなかった。そこで父親は彼を呼び寄せて、こう言った。「息子よ、行かぐよい、賢いクロクスの許へな。それともあの方の娘である利口な乙女たちのところへ。そしてお告げを何うのじゃ。神神がおまえのもくろみを肯うなつて、それがうまく行くようにしてくださいさるかどうかを。もし然らば、おまえは剣を佩おび、槍を手に取り、相続財産のために闘うがよい。然らずんば、息を引き取ったわしの目を閉じるまでここに留まり、そのあとはおまえの好きにするがよからう」。

らい、それくらいの数の砂金をな。そうすりゃわしはこの門を開けてやる」。がっかりした青年はすっかり意気消沈してそつとそこを離れた。予知者クロクスは反目し合っている何人かの大貴族間グレートの争いを仲裁者として調停するためポーランドに出かけている、と耳にしていただけになおさらで。三番目の妹に姉たちより好意的な応対をしてもらえるとは思えない。そこで、森の中にある彼女の父親の城を遠くの丘から目にしたものの、そちらへ近づく勇氣も出ず、とあるぎつしり茂った藪の中に身を隠して深い懊惱わうらうに浸った。ところが間もなく何か騒がしい物音にこの憂鬱な物思いから呼び覚まされた。一頭のすばしこい糜のろじかが藪を押し分けて来た。追いかけているのは鞍置き馬に乗った愛らしい女狩人かりうどとお付きの少女たち。女狩人が投げ矢を振りかざすと、矢はその手からひゅつと宙を飛んだが、獣には中らぬ。様子を窺っていた若者は素早く所持の弩いしゆみを引っ拵むと、羽根のついた短矢みじかやを唸りをあげる弦から弾き出した。矢は瞬時に獵獣の心臓を貫通、鹿はどざりと倒れた。この思いがけないできごとにびっくりした乙女は見知らぬ狩獵仲間を眺め回した。射手はこれに気づくと、前に進み出て、彼女に向かい恭しく低頭。リブツサ姫は、これほどの美男にはこれまで会ったことがない、と思った。最初の一瞥いちげつですぐもう若者の容姿から強い印象を受けた彼女は、知らず知らず好意を呑むいひなことができなかった。こうした好意、まこと幸多き姿形に与えられる特権である。「あのう、余所のお方」と彼女は話しかけた。「どなたですか。そしてどうしたことでこの囲い地に入られた」。青年は、探していたものがあるがたい巡り合わせで見つかった、と正しく判断、慎ましく自分が抱えている問題を打ち明け、情けなくも彼女の姉たちに門前払いを喰わされ、そのため滅入っていた次第については黙っていた。彼女は愛想の良い言葉で彼の心を明るくした。「私に随いておうちにいらつしやい。あなたのために運命の書に相談をし、明日日の出の折に答を差し上げましょう」。

若者は言われた通りにした。ここの宮殿の入り口では無礼な門番に行く手を遮られることもなく、麗しい居住者が

客人権に定められたことを彼に対し極めて寛仁大度に行使してくれた。こうした懇切な歓待は嬉しくてならなかったが、それにも増してうっとりさせられたのは優美な女主人の魅力の数数。彼女の蠱惑的な容姿こわくが一晚中目の前にちらつき、彼は睡魔の襲撃から入念に身を守って、恍惚として考え続けている昨日のできごとが一瞬たりとも脳裡から消え失せないようにした。リブツサ姫の方はと申せば、確かに穏やかな眠りに身を任せた。未来を予知する精緻な感覚の妨げとなる外界認識のもろもろの影響を遮断することが予言という能力に不可欠だったので。まどろんでいる妖精の娘の燃えるような空想は、その夜見た意味ありげな夢の像全てと若い外来者の姿を結びつけた。彼女は思いもかけない場所に彼の姿を見出した。どうしてこの未知の男性と関係があるのか彼女には理解できない状況で。朝早く目を覚ますと、いつもは夜の映像を選び分けて謎解きをするのだが、美しい女予言者は、幻想が正しい思考を乱したために生じた一夜の迷夢としてこれらを皆一緒くたに放り棄て、それ以上顧慮すまい、という気になった。しかし、何かよく分からぬ意識が、幻想の生んだものが全部が全部意味のない夢ではなくて、未来が明かしてくれているちゃんとしたできごとを示しているのだ、昨夜見たこうした予知的幻想はこれまでも増して運命の隠された諸決定を読み取り、自分に喋ってくれたのだ、と彼女に告げた。同じくこの方法でリブツサは、自邸に泊めた客人が自分に対する熱烈な恋に燃えているのを知った。そしてこれまた同様に彼女の心は彼に逢った時あからさまに同じ告白をしたのである。けれども彼女はすぐさまこの新体験に極秘の封印を捺した。一方謙虚な若者とはいうと、おなじく己が舌と目とに沈黙を課すことを厳しく誓っていた。屈辱的な退去を命じられないように。というのも、宿命が彼とクロクスの息女との間に築いた隔壁は到底乗り越えられないと思えたからだ。

青年の質問にどう答えるべきか、麗しのリブツサには完全に分かっていたが、そんなに慌ただしく彼を立ち去らせるのはなんとしても辛かった。日が昇ると彼女は若者を遊苑にいる自分の許へ呼び寄せ、「目の前にまだ暗闇の覆い



er Heimweg dünkte ihm nur wenig Ellen lang, so sehr war seine Seele mit dem Gedanken an die schöne Libussa beschäftigt, und er gelobte sich, weil er ihrer Liebe doch nie teilhaftig werden könne, auch keine andere zu lieben sein

が下がってしましましてね、あなたの運勢を見通せないのです。日が沈むまで待つて」と言い、夕方になると「夜明けまでいてください」、次の日には「今日のところは堪忍ね」、三日目には「明日まで辛抱してください」といった具合。四日目になるととうとう若者を放免したが、自分の内緒ごとを洩らさずには、これ以上引き留める口実が見つからなくなつたからである。彼女は優しい言葉でこう教えた。「神神はあなたが田舎にいる無法者と争うことをお望みではありませんせぬ。耐え忍ぶことが弱者の宿命です。お父様のところへお帰りになって、老後の慰めとなり、勤勉に働いて

養つておあげなさい。私の家畜の群から二頭の白い牡牛を贈り物に差し上げます。それから牛たちを御するのこの棒をお取りなさい。この棒が花を咲かせ、実をつけたら、予知の精霊があなたの上に降るでしょう」。若者は愛らしい乙女の贈り物を、計り知れぬ値打ちがある、と思ひ、お返しもできないのに贈り物をもらうのが恥ずかしくて顔を赤らめた。彼は言葉は訥訥と、しかしそれだけ一層物腰は雄弁に憂鬱な別れを告げたが、階下の門のところに二頭の白い牡牛が繋がれているのを見つけた。牛たちは、滑らかな背に処女エウロペを乗せて青い海原を泳いだあの昔の神が変身した牡牛のように綺麗で艶艶していた。彼は喜んで端綱を解き、のんびりと追ひ立てた。

三

帰り道はほんの数尺エレ³⁵にしか思えなかつた。それほど彼は全身全霊エ³⁴を

げて麗しのリブツサに夢中だったのである。そして、彼女の愛が頷かたれることは決してあり得ない、と思い込んでいた彼は、生涯他の女性を愛しはすまい、と固く心に誓った。老騎士は息子が帰ったのを喜んだが、賢いクロクスの息女のお告げが自分の願いと一致した、と聞いてなおさら喜んだ。さて若者は神神に農耕を天職とするよう指図されたので、時を移さず白い牝牛たちに軛をつけ、犁に繋いだ。最初の小手調べは思うがままに成功。牝牛たちはとても力が強く頑丈だったので、一日で十二連の牝牛が普通こなせるよりも多くの土地を片づけてしまった。なにしろ牛たちは、卯月の徴として雲間から飛び降りているあの暦の牝牛のように敏捷活発で、福音書でああものつそりと聖なる仲間たちの傍に牧羊犬みたいに座り込んでいる牝牛のごとく鈍重怠惰じゃなかったもんだから。

率いる民がボヘミアへ第一回遠征を行うのを指揮したチェフ公はもうとつくの昔に永眠していたが、その子孫らは彼の位と公国を継いではいなかった。なるほど大貴族たちは公の死後新たに君主を選ぶため集まったのだが、彼らの荒荒しい攻撃的な性格は分別のある決定を生まなかった。利己心と自惚れ根性が始めてのボヘミア公国議会をさながらポーランド国会のように変えてしまったのである。あまりにも多くの手が公の袞衣に掴みかかり、これをずたずたに引き裂いたので、だれも我が物にできなかった。統治は一種の無政府状態に陥り、だれもが好きなことをやらかし、強者が弱者を、富者が貧者を、大が小を抑圧するというあんばい。もはや国内には一般の安全などはなかった。だが、無頼の輩は、新しい共和国は申し分ない、と考えていた。なにもかも、と連中は言った、ちゃんとしたもんだ、おれつちのところじゃ他んとことおんなしでうまく行つてらあ、と。狼は羊を、沢鷺は鳩を、狐は鶏を喰らった。このようなかかげた体制は支持を得られず、夢想した自由の酩酊がだんだんに醒め、民族が再び素面に戻ると、理性が権利を主張し、愛国者たちが、実直な市民たちが、そして国民のうちで以前は祖国愛を感じていた者たちが、頭のたくさんあるヒュドラという偶像をぶち壊し、民衆を再び一つの頭の下に統一しよう、と協議会を結成した。「新しい君

主を選ぼうではないか」と彼らは言った。「父祖の風俗習慣に従って我我を治め、厚顔無恥な行為を抑え、法と正義を執行してくれる君主を。最も強い者、最も大胆な者、最も豊かな者ではなく、最も賢い者を我らが公にしよう」。小専制君主どもの擽取にとつくにうんざりしていた人人は、今度は異口同音に賛成、この提案に拍手喝采を送った。公国国会の開会の日取りが定められ、満場一致で賢いクロクスの選出が決まる。国君の位にお就きくださいませように、と招聘するため、特別使節団が派遣された。クロクスは高い名譽など欲しくはなかったが、それでもためらうことなく民衆の要請に従った。緋の衣を纏った彼は豪壯華麗な行列を作ってヴィシエフラトなる国君の城に渡御、ここで民衆は歓呼の声を浴びせ、統治者として彼に忠誠を誓った。これで彼は気づいたのだが、気前の良い妖精の三番目の葦の茎もその贈り物を彼に引き渡したわけ。

彼の公正愛好心と賢明な立法は間もなく周辺諸国全てにその評判を広めた。お互いしよっちゅういがみあうのが慣わしだったサルマティアの諸侯たちは、遠方から自分たちの抗争を彼の裁きに委ねた。彼はこの争いごとを自然の公明正大という絶対誤りのない度量衡で正義の秤に掛け、口を開けば、まるであの畏敬すべきソロンが語るか、あるいは二頭の獅子の間に座す英明なソロンが玉座から宣告を下すかのようなようだった。かつて何人かの扇動者どもが祖国の安寧に逆らって同盟を結び、神經過敏なポーランド国民を戦乱に巻き込んだ時、クロクスは軍の先頭に立ってポーランドに向かい、内戦を根絶やしにした。そこでこの民族の大部分は贈られた平和に感謝してやはり彼を公に選挙した。クロクスはその地にその名を彼に因むクラクフの町を建設したが、



この都市は今日に至るまでポーランドの諸王を戴冠する権利を持っている。クロクスは生涯最後の日日まで偉大な名声を以て統治した。彼は、自分にそろそろ終焉しゅうえんの刻が来てもうすぐ世を去る、と知ると、妻の妖精の住処みやまだったあの檜の樹の破片で櫃を作らせ、遺骸をこれに納めるように命じ、安らかに身罷みまった。三人の娘である姫たちは父の死を悼んで泣き、亡骸を櫃に横たえ、言付け通り埋葬した。そして全土が喪に服した。

壮麗な葬儀が終わると、貴族・聖職者・平民の各等族は空位となった国君の位にだれを就けたものか協議するため集まった。民衆は、クロクスの息女のどなたかを、という点で全く同意見だったが、ただ三姉妹のうちだれを選ぶかでは折り合うことができなかった。実を言うと、ベラ姫の支持者は一番少なかった、なにせ彼女は心根がよろしくなく、魔法のわざをしばしば害を及ぼすことに用いていたので。でも、人人にひどく恐れられていたから、わざわざ彼女に異論を唱えて恨みを買うなんて怖くてだれにもできなかった。さて票決となると、選挙人諸彦しよげんは皆黙りこくり、彼女に賛成と言う者は一人もいなかったが、さりとて反対も皆無だった。日が沈むと民族の代表たちは散会、選挙を次の日に変更した。今度はテルバ姫が推薦された。しかし、彼女は自分の呪文の力を確信するあまり目が眩くらんでおり、高慢で思いがつって、女神のように崇められることを要求、しよつちゅう薫香を焚かれていないと、いらいらと不機嫌で我侷わがくになり、麗しき性（＝女性）からこの心地よい形容詞を奪うありとあらゆる性格を顕あわにするのだった。なるほど彼女は姉君ほど怖がられてはいなかったが、だからと言って、姉君より愛されているわけではなかったのである。こうした次第で選挙場は葬式の食事の席のように森閑と静まりかえり、転調とはならなかった。三日目リブツサ姫が提案された。この名が挙げられた途端、選挙会場には和やかな囁きが起こり、しかつめらしい顔がのんびりし、晴れやかになり、選挙人諸公のだれもが陪席の人間にこの姫君の立派な性格を賞賛できた。ある者がその淑徳を褒めれば、二番目はその慎ましやかさを讃える。三番目はその怜愍さを、四番目はその予言が間違ったためしがないこと

を、五番目は相談者に対するその私心の無さを、十番目はその貞潔さを、九十番目はその美しさを、最後の者はその家政の執り方の巧みさを、といった具合。もし恋する男が恋する女性の完全無欠さについてこんな事項索引を作るとしたら、そのうちのたった一つだってその女性が持っているかどうか、いつだって疑わしい。しかし、大衆が判断する場合、良い評判の長所については容易に間違わない。短所の方では勘違いすることがまあしばしばだが。こう一般に認められた賞賛すべき特性に鑑みればリブツサ姫は勿論最も重要な国君資格者だった。少なくとも選挙人たちの胸三寸では。けれども縁組だったら、姉さんを差し置いて妹を嫁に、というのは、経験則に照らすとしばしば家庭平和を乱すことさえある。そこでこうした選択がもつと大事な案件で尊い国の平和の障害となるのが許されるのか、憂慮されるべきであった。こうした考えが民族の聡明な後見人たちをすこぶる当惑させたので、彼らは議決に達することができなかつた。事を進行させ、立派な信念に効力を發揮させるべき時に、雄弁という振り子の錘おもりを選挙人諸氏の善意にぶらさげずにはおかない演説者が欠けていたのである。そしてこうした人物がお詔めいえ向きに登場した。

ヴラドミルはボヘミアの大貴族の一人で、公に次ぐ地位にあつたが、もうとつくから魅惑溢れるリブツサを想つて切なく吐息を洩らしており、父クロクスの在世中彼女に求婚もしたのである。彼はクロクスの最も忠誠な封臣の一人で、クロクスから息子のように愛されていた。そこで善良な父親は、愛がこの兩人を夫婦めおとに結んでくれたら、と願つたのだが、つれない乙女心には歯が立たず、また彼は決して彼女に無理強いして承知させるつもりはなかつた。だがヴラドミル侯は、こうした怪しげな星相にもひるまず、誠忠を尽くして姫のかたくなな気持ちに耐え抜き、優しさでそれを和らげよう、と考えてしまった。彼は公の命が終わるまで随き従つた。だからといって一歩たりとも望みの目標に近づいたわけではなかつたが。さて今や彼は、献身的行為により姫の閉ざされた心を開き、自発的ではなくとも彼の恋を認めてくれるかも知れない、是非ともお礼を、という雅量を引き出す機会が見つかった、と思つた。彼は、

二人の恐ろしい姉たちの憎悪と復讐に身を曝し、命の危険を顧みず、いとしの君を玉座に上せよう、と決意。彼はふらふらしている選挙会議の不決断に気づき、口を切つてこう述べた。「我が民族の雄雄しき騎士、貴族諸卿、聴いてくださるなら、一つ譬え^{たと}断^{ばなし}をお聞かせいたしたい。そうしたらお悟りになれよう、目下の選挙を祖国のためすこぶる有益に完了するにはどうすればよいか」。静肃が命じられると、彼はこう続けた。「蜜蜂¹⁷の群に女王蜂がいなくなつた。巢全体がやる気がなくなり、しょんぼりし、外へ飛び出すものろろでその数も僅か、生業^{なりわい}も暮らしもすつかり衰微した。そこで一同は真剣に考えた。秩序規律が完全に壊滅しないように自分たちの国政を取り仕切つてくれる新しい首長のことを。すると雀蜂¹⁸が飛んで来て言った。『私をそなたたちの女王に選ぶがよい。私は強くて恐ろしい。尊大な馬が私の針に怯える。そなたたちの宿敵の獅子¹⁹にさえ私はこれで挑戦できる。獅子がそなたたちの蜜を貯めた樹⁵⁰に近づこうものなら、鼻面を刺してやれるのだ。私がそなたたちを庇護してとらせよう』とな。蜜蜂どもにはこの弁舌が大層気に入った。しかし、とつくり思案をした拳句、彼らの中で一番賢い連中はこう答えた。『あなたは頑強で恐ろしい。でも、我我を守つてやろう、とおつしやるその針こそ私たちには怖いもの。あなたは我我の女王になれませぬ』。次に丸花蜂⁵¹がぶんぶんやつて来てこう言った。『私をそなたらの女王にするがよい。私の羽の唸りこそ高貴偉大を告知するもの、と聞いていないか。そなたらを守護するための針も私には欠けておらぬぞ』。蜜蜂たちは答えた。『我我は平和で穏やかな一族。あなたの羽の誇り高い唸りは我我を不安にし、我我の勤勞の妨げになるだけでしょう。あなたは我我の女王にはなれませぬ』。すると蜜蜂が発言を求めた。『私はそなたたちより大きくて強健ですが、私が勝っているからといって、それがそなたたちの損・不利益になることは決してあり得ませぬ。なぜなら、ご覧、あの危険な針が私には全く無いからです。私は優しい気性、かつまた、秩序と家政が大好き、蜜作りを取り仕切り、仕事を励ますすべを心得ております』。すると蜜蜂たちが言った。『我我を治める資格があるのはあなたです。

我我はあなたに従います。我我の女王になってください」とな。

ヴラドミルは口を噤んだ。会衆は皆彼の演説の意味を推察し、人心はリブツサ姫に有利な評決をしようと動いた。しかし諮問を行おうとしたその折も折、一羽の鴉がかあかあ啼きながら選挙場を横切った。この不吉な徴にそれ以上の審議は全て中止となり、国君選挙は翌日まで延期された。選挙を妨げるため、凶兆を示すこの鳥を送り込んだのはベラ姫だった。選挙人諸公の気持ちに傾いたか、よくよく分かっていたからである。そしてヴラドミル侯はベラのこの上もなく痛烈な恨みを我が身に買った次第。彼女は妹のテルバと相談、二人がもろともに受けた侮辱に仕返しをしよう、どっしり重い夢魔を送りつけて、彼の体から魂を搾り出してやろう、と決めた。大胆不敵な騎士はこうした危険は何一つ予感せず、いつものように主と仰ぐ姫君に表敬訪問をしに赴き、初めて親しげな眼差しを向けられた。これで彼は空一杯の歓喜を約束されたような気分になった。この上更にびっくり仰天しようもなかったが、そればかりかなんと姫の胸に色鮮やかに付けられていた薔薇を下しおかれたのである。姫は差し出しながら、これをそなたの心臓に置いて萎ませるのですよ、と言いつけた。彼はこの言葉に姫の言った意味とはまるで違って解釈した。なにせ恋愛解釈学ほど当てにならない学問は無い。この分野では誤りがまこと日常茶飯事。血道を上げている騎士にとって大事なのは、薔薇をできる限り生き生きと花開いた状態に保っておくことだったから、彼は汲みだての水を満たした花瓶に薔薇を活け、甚だ心地よいさまざまな希望を抱いて寝入った。

四

身の毛もよだつ真夜中にベラ姫に送り出された死魔が忍び寄り、喘ぐその息を吹きかけて寢室の扉の門も錠も開け、眠っている騎士の体の上に百貫目もの重みでのしかかり、窒息させようとしたので、目を覚ましたヴラドミルは頸の



n der schauerlichen Mitternachtsstunde kam der Würgengel von Fräulein Bela ausgesandt herangeschlichen, blies mit seinem keuchenden Atem die Riegel und Schlösser an den Türen des Schlafgemachs auf, fiel mit Zentnergewicht auf den schlafenden Ritter, und würgte ihn sozusammen, daß er im Erwachen vermeinte es sei ein Mühlstein ihm auf den Hals gewälzt. In dieser ängstlichen Beklemmung, da er wähnte der letzte Augenblick seines Lebens

上に水車の碾き臼を転がされような気がした。この息が詰まりそうな恐怖の最中、もうこれが最後と思ひ込んだ時、幸いにも彼は寝台の傍の花瓶に挿してあるあの薔薇のことを思い起こし、それを胸に押しつけてこう言った。「麗しい薔薇よ、私と一緒に萎れておくれ。そして冷たくなつて行く私の胸で死んでおくれ。私の最後の想いが今はの際でもおまえの愛らしい女主人に向けられていたことのかかしとして」。瞬時にして彼の心臓の周りは軽くなった。重い夢魔は薔薇の魔力に抗えず、その押し潰す重みはもはや鳥の綿毛ほどでもなくなり、薔薇の香りが嫌いなのでその後すぐに寝室から退散した。そしてこの芳香の麻酔性の効き目で騎士は再びすやすやとまどろんで英気を回復。目が昇ると彼は元氣溼刺と起床、自分の譬え嘶が選挙人諸公にどんな印象を与えたか探り、今度はこの会議がどんな行動を取るか見届けるため、選挙場へと馬を駆った。万一反風が吹き起こり、彼の希望と願いといて漂う小舟を浜に乗り上げさせるようなことがあれば、自ら舵を取つ

て、その針路を定めようとも考えて。

しかし今回は全く危険は無かった。真面目な選挙評議会はヴラドミルの比喩を一晚慎重に反芻消化したので、これは完全に心魂に徹していた。こうした有利な潮時を察知し、かつ恋の道に關しても情の深いヴラドミルと想いは同じだった機を見るに敏なある騎士が、姫君をボヘミアの玉座に上せる、という榮譽をヴラドミルから奪うか、あるいは



ヴラドミールと分かち合おう、ともくろんだ。彼は起立すると、さつと剣を引き抜き、高い声で、リブツサ姫をボヘミアの女公に、と叫び、同志の方はこの選挙を支持するため剣を抜かれい、と要求した。すぐさま何百もの白刃が選挙場に閃いた。声を合わせた歓呼が新たな女性統治者が決まったことを触れ、至るところで「リブツサを我らが女公に」と叫ぶ歓喜した民衆の叫びが響き渡った。委員団が選出され、ヴラドミール侯と剣を抜いた騎士が筆頭で、国君に推戴されたことを姫君に言上した。彼女は慎ましやかに顔を赤らめ、これがまた多数の女らしい魅力に優美な最高の色合いを添えたが、民族を統治することを引き受けた。彼女のなんとも愛くるしい姿を見ると、魔法に掛けられたようになって、だれもが彼女に心から臣従したのである。民衆は大いに凱歌を挙げて彼女に忠誠を誓った。二人の姉たちは妹を妬み、自分たちが撥ねつけられたと思ひ込んで、妹と祖国に復讐しようと思法を駆使した。妹のやることなすこと全てを非難・中傷し、そうした醜母によって国民の間に有害な発酵を惹き起こし、いかにも娘らしい温和な統治の安息と至福とを蝕もうというわけ。もつともリブツサはこうした姉妹らしからぬ所業に賢明に対処し、悪意を持った姉たちの敵意ある陰謀や妖術を無効に

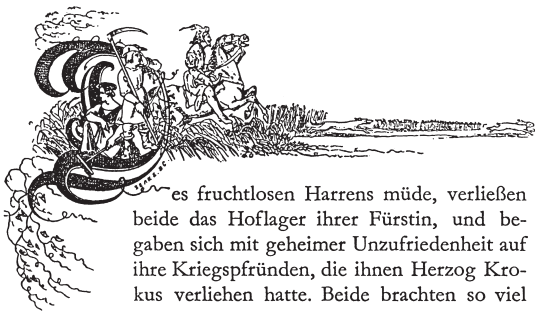
することができたが、やがて自分に対する何の役にも立たない姉たちのちよっかいを相手にするのにうんざりした。一方恋い焦がれるヴラドミルは切切と運命の進展を待ちもうけていた。彼は、この望みが好い加減に叶えられないものか、仕える女公の美しい双眸から読み取ろう、と一度ならず試みた。しかしリブツサは心中何を考えているのかについては深く沈黙を守っていた。それに、あらかじめ目を見交わすとか意味深長な目配せとかで交渉もしないで愛する女性から口頭での告白を要請するなんて、いつだって間違つたもくろみなのである。まだ彼の希望を繋いでくれている唯一の有望な徴は萎れることのないあの薔薇だった。この花は一年経つても相変わらず、麗しのリブツサの手から受け取ったあの夕べと同様生き生きと咲き誇っていた。少女から手渡された一輪の花、花束、髪を結ぶ布紐リボン、さてはまた一房の巻き毛などは勿論抜けた歯なんぞより値打ちがある。けれどもこうした綺麗な品物も、ちゃんと当てる言葉でもってはっきりした意味を与えられていなければ、恋のあかしとしては曖昧なのだ。かくしてヴラドミルは崇める優美の女神の宮廷で遣る瀬無く焦がれる羊飼いの役割を人知れず演じ、時間と状況が将来自分に有利に働いてくれるのを切望していた。あのせつかちな騎士ミジスラ54はこれよりずっと活発に自分の恋を推し進め、折あるごとにしゃしゃり出て、認められようとした。臣従表明の日、真つ先に新しい女君主に忠誠の誓いを捧げた封臣は彼だった。月が地球に、といった具合にどこでもびったり彼女に随き従い、頼まれもせぬのになにくれと奉仕して主君のお人柄への心服ぶりを誇示、公の行事や行進となると、彼女の目に入るように剣をきらめかせ、これがお役に立つたことを忘れずにもらおうとする。

しかしリブツサは、世の習いはなべてそうしたものだが、自分の運勢を後押ししてくれた男たちのことをすぐにもう忘れてしまった様子だった。なにしろ方尖塔オペリススク55がひとたび直立すれば、それを押し立てるのに用いられた梃子てこやらなにやらの工具類はもはや一顧だにされないでしょう。少なくとも、姫の心を得ようと競い合う者たちは、彼女って薄

情なんだなあ、と解釈したわけ。しかし彼らは二人とも姫の気持ちを思い違っていた。玉座に就いたこの高潔な女性には非情でも思知らずでもなかったのだが、その心はもはや自分の好きにどうにでもなる自由な所有物ではなかった。恋というものの鶴の一声で既にあのすらりとした猟獣の射手に勝訴の判決が下っていたのである。彼を見た時彼女が抱いた最初の印象がいまだに強い効果を及ぼして、以後の印象がそれを消し去ることはできなかった。三年のうちひと時とて空想力が描いたあの気品に満ちた若者の肖像の色合いを僅かでも褪せさせたり拭い去ったりすることはなかった。かくして愛は完全に実証された次第。なにしろ麗しき性の情熱は、三回の月の移り変わりの試練に保ち堪えれば、三掛ける三年かそれ以上も長続きするのが普通という性質、性状なのである。これは十八世紀当代の明白な例証、実証に基づく。ブリタニアの我侷な娘とその母国との内輪喧嘩を戦い抜くため、ドイツの雄雄しい息子らがはるばる海を渡った時、彼らは誠実と変わらぬ愛を交交誓い合って美しい乙女らの腕から身をもぎ放したのである。しかし、まだヴェーザー河の最後の樽型水路標識をあとにしないうちに、海外派遣兵たちはおおかた彼らのクロエに忘れられたのだ。移り気なお嬢さんがたは、相手がいなくちゃすることがなくて辛いわあ、とばかり、できた隙間をさまざま新たな色恋の代替品で埋めた。けれども、このヴェーザー河の試練を毅然と耐え抜き、心を捧げた相手が黒い樽型水路標識の彼方へ去ってしまったとしても不実の罪を犯さなかった貞淑な恋人たちは、気高い勇士の群が祖国ドイツに帰還するまで誓いを固く守ったそう。今や彼女らは永久に変わらぬ心を持ち続けた褒賞を愛の手から受けるのを待っている。

だからあまり不思議なことではなかったのだ。こうした状況下でリブツサ姫が自分の心を得ようと切願する華やかな若殿ばらの努力に抵抗することができたのは。美しいイタケの王妃が求婚者の全部隊に無駄に自分を恋い焦がれさせていたのは、白鬚のウリクセスだけが頼みの綱だったのだから、それに較べればそんなにね。さはさりながら、階

級、出自からいうと、姫と彼女が心を捧げている恋人の状況は極めて均衡を失っているので、プラトンの愛情関係——これだつて空しい影絵芝居で、滋養にもならないや暖めてもくれない——より近い仲になることはそう簡単に望めなかった。この往古の時代、家系作成は、甲虫を触角や鞘翅、花を花糸や花粉路、萼や雌蕊で系統づけるほどにも、系図やら羊皮紙文書に頼ったわけではなかったのだが、それでもそそり立つ楡の配偶者は見事な葡萄の蔓こそ相応しく、垣根に這うガルトンツヴィルン(65)はそぐわない、ということは心得ていた。一寸くらの階級差の不釣合婚は無論その頃だと古典主義的な当節ほど小やかましい騒ぎを惹き起しはしなかったが、一尺もの相違があるとなると、紐の両端の隔たりをあからさまに言い立てる競争者が間に介入する場合はことに、昔でも大いに人目についた。こうした一切合財(66)、それからまだまだとてもたくさんのことを聡明な性格の姫は充分考え廻らしていた。だから情熱というこのあてにならない口軽女が、愛神お気に入りあの若者の得になることをどんなに声高に言い立てても、それに耳を貸さなかった次第。一種の純潔なウエスタの巫女である彼女は、生涯処女として男に心を閉ざし続け、目でも、身振りでも、言葉でも、唇でも、求婚者の問いかけに応えない、という取り消しできない誓いを立てたのである。ただしその当然の補償として好きなだけ精神的恋愛に耽るという留保条件付きで。こうした修道院めいた方式など二人の志願者にはろくすっぽ意識できなかつたから、彼らはこちらの気持ちに萎えさせる女性の主君のつれない態度がさっぱり訳が分からなかつた。恋にはつきものの嫉妬というやつが二人の耳に辛い邪推を吹き込んだ。彼らはお互い、相手こそ幸運な恋敵だ、と思い、彼らの観察精神は、怖くてたまらない発見をしよう、と飽かず見張りを続けた。だがリブッサ姫は抜け目無く用心して、尊敬すべき両騎士に彼女の僅かな愛顧の徴を釣り合いが同じになるよう示したので、どちらかの秤皿が重くなることはなかつた。



es fruchtlosen Harrens müde, verließen beide das Hoflager ihrer Fürstin, und begaben sich mit geheimer Unzufriedenheit auf ihre Kriegspründen, die ihnen Herzog Krokus verliehen hatte. Beide brachten so viel Unmut mit in ihre Heimat, daß Fürst Wlado-

五

痛んでならなかった。こうした不祥事をどうやって止めさせたものか、と思索した彼女は、聡明なので、正義を振興する場合犯人どもをただちに現行犯で罰することのない賢い神神の真似をしようという気になった。それでもゆつくりとあとを随いて行く復讐が遅かれ早かれ彼らに追いつくのだ。若い女君主は騎士たちと諸等族を召集、ボヘミア国全体法廷を開催、何か訴えたいことのある者、不正を摘発したい者は自由に憚ることなく出頭せよ、自由通行権を与える、と公に告示させた。すると公国の至るところからひどい目に遭った者、虐げられた者が集まって来た。争い好

いくら待っても成果がないのに倦みあぐねて、二人は女君主の宮廷をあとにし、心中不満やるかたなく、戦功の褒賞にクロクス公が与えてくれた封土に赴いた。二人ながら憤懣かんまゑやるかた無くむしゃくしゃして故郷に帰ったものだから、ヴラドミル侯は家臣や隣人全ての重荷になった。一方ミジスラ騎士は狩猟家になり、家来の畑や狩り場で麋や狐を追いかけ、一羽の兎を狩り立てるために供の者ともども十マルター68もの穀物を馬で踏みにじってしまうことがしばしばだった。そのため溜め息と悲嘆が国に大層沸き起こったが、このような乱行を押し留めようという裁判官はいなかった。なにせ民への抑圧の数数は女公の玉座には達しなかった。しかしその千里眼のお蔭でリブッサにはその領土の広大な国境内の不正は何一つ内緒のままではいなかった。それに彼女の氣立てはその愛らしい容姿の優しい特徴に相応しかったから、封臣たちの不埒な所業と大貴族たちの横暴に胸が

きも、訴訟狂も、それから法的な緊急事を抱えただけでもかれもが。リブツサはさながら剣と秤を携えたテミス⁶⁹のように玉座に座り、判決を下して行った。人によって差別することなく、適確な裁きで。なにしろ彼女は、そんなじよそこらの愚かな裁判官の鈍いおつむみたいに、狡賢い詐術の迷路のような手口に惑わされることはなかったから。そして、錯綜する所有権争いの案件で、纏れた審理の糸玉から、間違つた端っこを引つ張り出さず、正義の隠れた糸筋を見つけ出し、くぐらせ、解きほぐして行く叡智と倦むことのない辛抱強さに一同驚嘆した。

法廷に群がった訴訟当事者たちの混雑が段段に減つて、会議をそろそろ散会に、となつてからの裁判最終日にまだ、豊かな所領を持つヴラドミルと境界を接する開墾農民⁷⁰が一人、それから狩猟好きのミジスラの領民らの代表者たちが、訴願提出のためリブツサにお目通りを願つた。謁見を許されると、まず例の農夫がこう口を切つた。「ある勤勉な開拓者ですが」と彼は言つた。「ちつぽけな区画を柵で囲いました。ある幅の広い川の岸辺にな。この川の白銀の流^{しろがね}れはさらさらと穏やかな音を立てて心楽しい谷間に注ぎ下つておりました。百姓は考えましたのじゃ。見事なこの流れは、蒔いた種を食いしん坊の野の鳥獸が台無ししないよう、そちら側からわしを守ってくれようし、それからすぐに育つてたっぷり果物を付けるよう、わしの果樹の根っこを灌溉してくれるだろうて、とな。けれども百姓仕事の収穫が手に入ると、当てにならない川は水を濁らせ、静かだった流れは轟轟とざわめいて膨れ上がり始め、岸辺に溢れ出すと、実り豊かな畑を一つまた一つと攫^{さら}つて行き、耕地の真ん中に川床を掘じくつてしまい、哀れな開拓者の大層な悩みの種となつております。この男は自分の土地を横暴な隣人のほしいまま、意地の悪い慰みの犠牲にしなければなりません、自身この貪欲な川から逃げ出すのがやつとでしたのじゃ。賢いクロクス様のお偉いご息女様、哀れな開拓者が心からお願ひいたします。この思い上がった流れに命じてください。そのいばりくさった波どもが勤勉な百姓の耕地をもちや押し流すことなく、その本来の川床の内側を静かに流れて、百姓の流した酸っぱい汗が愉しい収穫の



希望を呑み込めるようにしておやり、とのう」。

この訴えの間に麗しのリブッサの晴れやかな額は暗くなり、その目は剛毅な威厳に輝いた。周囲の者たちは全て、判定を聴こう、と耳を翫そだてた。これなんかのごとし。「そなたの問題は簡單明瞭です。そなたの権利が暴力に曲げられることがあってはなりません。言うことを聞かぬ川には乗り越えることの叶わぬ堅固な堤が節度を教えます。荒れた流れが奪った物については、私とその七倍の弁償を彼の魚でそなたに与えましょう」。次いで彼女が領民のうちの最長老に話すように合図すると、こちらは深深と頭を下げてこう述べた。「誉れ高きクロクス様の賢いご息女様、教えてくださいませ、畑の作物はだれのものでございましょう。芽が出て穂を付けるように種を大地に鋤すきこんだ種蒔く人のものでしょうか。それとも、これを踏みじり、滅茶滅茶にする突風のものでしょうか。答。「種蒔く人のもです」。「それでは突風にご下命のほどを」と発言者。「わしらの実った畑を大はしゃぎの闘技場にせぬよう、作物を踏み躪にじらぬよう、果樹を揺さぶらぬように、とな」。「しかあれかし」と女公は応じた。「私は突風を制御し、そなたたちの耕地から退去させます。突風には、北方から襲来して、この国を電や悪天候で脅かすおどす。叢雲むらぐもと闘い、これを追い散らしてまいります」。

ヴラドミル侯とミジスラ騎士はボヘミア国全体法廷の二人の陪席裁判官だ

った。提訴と女君主の峻厳な宣告を聞くと、彼らは蒼褪め、怒りで顔を歪めて目を落としたが、女の口から宣告を受けて有罪と断じられたことに、どんなにむしやくしやくしているか、ぶちまけることもできなかった。なぜなら彼らの名誉を考慮して告訴人たちは慎ましく訴えを寓意の面紗で覆っていたし、裁判長の判決もこの装いを賢明に尊重したからである。とは言え、この布はとても薄手で透け透けだったので、目のある者は、覆われているのはだれだか、ちゃんと見て取る事ができた。下された判決に民衆は全員雀躍りして大喜びに沸き立ったので、女公の法廷で彼らに向かつて抗弁するのも憚られ、兩人ともに不平満満ながら判決に従った次第。ヴラドミルは隣人の農夫に七倍の損害賠償を支払い、獵人ミジスラはもはや領民たちの穀物畑を兎狩りの獵区にはしない、と騎士の名譽に掛けて誓約しなければならなかった。同時にリブツサは彼らにもっと立派な仕事を与えたが、これは彼らの本務を遂行し、今や打ち碎かれた器みたいで、ただもう悪評芬芬の彼らの評判に騎士の美德の声望を取り戻すものだった。彼女は二人を自軍の指揮官に任命、軍をソルブ人の君主ツオルネボックに向けて送り出した。ツオルネボックは巨人で、その上強大な魔法使いであり、当時折からポヘミアを我が物にしよう、と企てていたのである。その際リブツサは彼ら兩人に、一人がこの怪物の冑の羽飾りを、もう一人がその黄金の拍車を、勝利のあかしとして差し出すまでは、宮廷に帰還してはなりません、との贖罪を課したのであった。

例の萎れることのない薔薇はこの戦役でもその魔力を顕した。ヴラドミル侯はそのお蔭で致命的な武器を振るわれども英雄アキレウスのように傷つかなかつたし、蝶のアキレウスのように速く、軽やかで、すばしこかった。彼我兩軍は公国の北の国境で遭遇、合戦の合図が下された。ポヘミアの勇士たちはさながら嵐や旋風のごとく騎馬隊の中に飛鳥の速さで突っ込み、刈り入れ人の大鎌が小麦畑を刈り取るように、槍の列を薙ぎ倒し、ツオルネボックは二人の強烈な剣の一撃に殪られたのである。彼らは約定の戦利品を携え、凱歌を挙げてヴィシエフラトに帰還、前に彼ら

の騎士の美德を汚した染み、穢れを敵の血潮で綺麗に洗い清めた次第。女公リブツサは君主の愛顧の徴であるありとあらゆる榮譽を二人に与え、軍が解散すると、彼らを故郷へ引き取らせせたが、その際いわば新たな恩寵のあかしとして自らの遊苑で採れた真紅の林檎を一個、思い出のよすがに持たせて送り出した。これを仲良くお互いに分けるよう、ただし断ち切つてはいけません、と付け加えて。さて彼らは出立し、その林檎を一枚の盾の上に載せ、それを後から見ながら運ばせて行つた。これを下賜した穏やかな女性の意図をゆるがせにしないよう、どうすれば利口に分配をやってのけられるものか、と相談しながら。

自分の住まいへの道をそれぞれ辿るために袂を分かつたねばならぬ岐路に差し掛かるまで、二人はごく和氣藹藹と分割案件を論議した。しかし今や、持ち分同じの林檎をどちらが手元に置くか、ということが緊要。だって、両方が、欲しくて堪らない大層な奇跡の数をこいつに期待しているのに、一人しかもらえないのだから。そこで彼らは險悪になり、分けられない林檎は闘いで勝つた方のもの、どちらが勝つか剣で決めよう、ということになった。そこへ羊飼いが羊群を追つて同じ道をやつて来た。で、彼らはこの羊飼いを仲裁人に選ぶことにして、事の次第を説明した。おそらく例の三柱の有名な女神たちが林檎争いの決着をやりますのう。羊飼いはちよつと思案してから、こう言った。「林檎の贈り物には深い隠された意味がありますのう。じゃが、この意味を封じ込めたあの賢い乙女の他、どなたにそれが見つけ出せましょう。わしゃあ、この林檎は諍いの樹で熟した油断のならない果物だ、と思いますじゃ。真つ赤な皮はあなたがたお殿様たちの間の血で血を洗う争いを意味しとりまして、お互い殺しあつて、この贈り物を楽しめはしないちゆうことですのう。だつてな、切らずに林檎を分けるなんてどうしてできましようぞ」。羊飼いのこの言葉は二人の騎士の肝に銘じ、彼らは、これには深い叡智が含まれている、と考えた。「そちの判断は正しい」と彼らは言った。「この縁起でもない林檎はもう我らの間に怒りと争いを引き起こしたではな

いか。我らを憎んでいるあの傲慢な姫の油断のならぬ贈り物のために戦仕度をしたところではないか。姫が我らを軍の指揮官に任命したのは、我らを討ち死にさせようと思つてのことではないのか。そして、それがうまくゆかないので、今度は、我ら自身に向けられる不和の短剣を我らの手に渡したのではないか。かような悪企みの贈り物にはおさらばをいたそう。我らのいづれも林檎を取るまい。林檎はそちのまつとうな教えの礼としてそちに遣わす。審判の果実にありつくのは裁判官、訴訟当事者の手に入るのはその皮、と申すでな」。

二人の騎士はてんでんの道を行き、一方牧人はとうと係争物件を裁判官によくある悠悠然とした態度でばくついた。ヴラドミールとミジスラは女公の曖昧なご下賜品に既に大いにむしゃくしゃしたが、古里に帰つてみると、もう以前のように封臣や領民を好き勝手に牛耳ることができず、リブツサ姫が公共の治安のために全土に布告させた法令を遵守しなければならなくなつてゐるのを発見したので、その憤激はさらに膨れ上がった。彼らはお互いに攻守同盟を結び、国中に支持者を獲得した。そこでたくさんの扇動者らが仲間に加わつて来ると、二人はこの者どもを送り出して、領邦中至るところで女性による支配を誹謗中傷させた。「ああ、不面目なこつた」と連中は言つた。「わしらの稼いだ月桂冠を集めて、それで糸巻き竿を飾り立てる女なんぞに仕えてるだなんてよ。一家の主人として相應しいのは男なんで、女じゃねえだ。こいつは男の生得の権利だで。そんじよそこらどこの民族だつてこういう慣わしだべさ。軍隊を率いて進む公のいねえ軍隊なんちゆうのは、頭のねえ役立たずの胴体とどこが違うだ。わしらに男の君公をあてがつてくれる。わしらの主になつてもらつて、そのお方に従うべえさ」。

こいつといった遊説が注意深い女君主に気づかれずにはいかなかった。彼女はこの風がどこから吹いて来たのか、そのざわめきが何を告げているのかもちゃんと分かつていた。そこで各等族の代表者会議を招集、地上に降り立つた女神のような栄光と威厳で彼らの真ん中に歩み入り、その純潔な唇から蜜のように流れ出たのはこつした弁舌。「噂によれ

ば」と彼女は集まった者たちに語りかけた。「そなたらは、先頭に立って戦に率いて行く男性の公を欲しがっているとか。また、そなたらはこれ以上私に従うのを恥ずべきことだと思っていると。しかしながらそなたらは自由な拘束されない選挙により、そなたらのお仲間内からだれか男性をではなく、民族の娘らの中から一人を選び、緋衣を纏わせ、この国の習俗習慣に倣ってそなたらを治めて欲しい、と望んだのです。統治で何か失政を犯したと私を咎めることのできる方は、遠路なく公然と進み出て、私が間違っている、と証言なさるがよい。なれど私が父クロクスの仕置きに従い、賢い方策と公正を執行、丘を平らにし、曲がりくねった道を真っ直ぐにし、沼地を通行できるようにしたのであれば、そなたらの収穫を安全にし、そなたらの畜群を狼から取り戻し、果樹を守ったのであれば、権勢ある者たちの頑固な項うなじを下げさせ、押さえつけられた人たちを助け起こし、弱者には繩すがれるように杖をあげたのであれば、それならば、そなたらの約束に従い、かつて私に忠誠を誓ったように、私に対し真心を尽くし、信実、まめやかに行動なさるのが、そなたらの務めでありましょう。もし、女の言うことを聴くのは不面目だ、とそなたらがお思いになるなら、私をそなたらの女君主の位に就ける前にそのことを思案なさるべきだったのでは。そのことに不都合があるなら、それは全てそなたらが負うべきこと。けれどもそなたらの言動から、ご自分がたが得をしているのだということがお分かりでないのが明らかになりました。つまりこうです。女の手は穏やかで柔らかく、団扇うちわで涼しい風だけを扇ぎ出すのに慣れていません。けれど殿方の腕は筋張っていて荒荒しい。最高権力の重みを掴むと、押さえつけ、重くのしかかります。それにそなたらはご存知ないのですか。女が統治している場合、支配権は殿方の手にあるのだ、ということ。なぜなら女君主は賢明な男性顧問がたのおっしゃることに耳を傾けるからです。でも紡錘つむみを玉座ぎから締め出すと、女の天下になるのですよ。なぜなら王が目をつけた女たちが王の心臓を手に入れるからです。それゆえそなたらの企てをよくよく思案なさい。一時の気紛れきまぐれを後悔することのないように」。

玉座の語り手が口を噤むと、会議場は深い敬意に満ちた沈黙でしんと静まりかえった。あえて彼女に抗弁しようとするものは一人もいなかった。だが、ヴラドミール侯とその一味徒党はもくろんだことを諦めず、お互いにひそひそ耳打ちしあつた。狡い森羚羊めは肥えた牧場から引き上げるのを渋っておる。が、狩りの角笛をもっと高らかに吹き鳴らし、とにもかくにも追つ払おう(2)、と。翌日彼らは騎士階級を使噤したので、この者たちは女君主に、三日以内にご配偶を見つけ、御心の選択によつて、ご一緒に統治権を分かち合う男性の君主を民草に与えて戴きたい、と激しく詰め寄つた。見かけは国民の声であるようなこの性急な強請に魅惑的なりブッサの頬は乙女らしい恥じらいに紅く染まり、その澄んだ目は、この機会に危険で彼女を脅かそうとしている、水面下に隠れた暗礁をことごとく見通した。彼女とて国政上の識見に従つて情愛に身を任せたかつたが、その手を与えてもよい求婚者はたった一人である。そして、他の全ての公位請求者らはこうした格下げを侮辱と受け取り、復讐を企むだろう、と悟つていた。その上あのひそかな胸の誓いは彼女にとつて神聖にして冒すべからざるもの。だからリブッサは等族の強引な要求を上手に拒むように努めよう、男性の公選びを彼らに思い留まらせる試みをもう一度一所懸命やつてみようとした。「鶯が死ぬ」と彼女は語つた。「鳥たちは森の鳩を女王に選びました。全ての鳥が鳩の穏やかなうくうくという啼き声に従いました。しかし鳥たちの本性はもともと軽はずみで気紛れですから、間もなく彼らは決心を変え、前のことを後悔しました。高慢な孔雀は、統治するのは自分の方がよっぽど相応しい、と考え、小鳥たちを獲るのが巧みで、我欲の強い兄鶴は、平和な鳩などに臣従するのは恥ずかしい、と思ひました。彼らは仲間をこしらえ、目がよく見えない鶯木梟を彼ら一味の代弁者に雇ひ、男性の王の選挙を提議させました。愚かな野雁、体の重たい大雷鳥、のろまな鶴、おつむの弱い青鷺など全ての比較的大きな鳥たちは鶯木梟の言うことに喧しく喝采を送り、翼をしきりに広げたり、かちかち嘴を鳴らしたり、があがあ啼いたりしましたし、小鳥たちの大群は思慮分別がないものですから敷



aum hatte der räuberische Vogel den Thron eingenommen, so bewies er an den gefiederten Untertanen seine Mannskraft und

や生垣の中から同じ歌を囀さえずりました。そして鬩きいに強い沢鷲さきすずが大胆不敵に空高く舞い上がると、鳥たちはことごとく叫びました。『なんとという堂堂とした翔とび方だろう。辺りを睥睨へんげんする目はなんとまあぎらぎらしていることか。曲まがった嘴くちばし、ぐいと広がった鉤爪かぎづめはなんと立派な様子なのだ。勇猛果敢で雄雄しい沢鷲を我らが王にしよう』と。

六

そこでこの肉食の猛禽が玉座に就き、臣下の鳥たちとその威力と所業を大いに専制的かつ尊大に示しました。つまり、大きな鳥類からは羽根を雀むじり取り、小さな歌鳥はずたずたに引き裂いたのです」。

この話はとても意義深かったのだが、是が非でも政權交代を欲する連中にはろくすっぽ感銘を与えなかつたので、リブツサ姫におかせられては三日以内にご配偶を選んで戴きたい、との国論は変わらぬままだった。ヴラドミル侯は心中大いに喜んだ。なにせ長いこと憧れ望んだのに無駄骨だった素晴らしい獲物をこれでやっとこ手に入れられる、と思ったので。愛と野心が彼の数数の希望を鼓舞激励、また、これまでは人知れぬ溜め息をつくのが精精だったその口を能弁にした。彼は宮中に伺候しよして女公に謁見を願ひ、こう言上したものだ。「ご領民と我が心の恵み深いご主人様。あなた様には秘密を隠しておけませぬ。この胸に燃え盛る炎、神神の祭壇の火のように神聖で清い炎はご承知でおられる。また、いかなる天界の火がこれを点けたのかも。今やあなた様は民衆の要請に応えこの国に男性君主を

お与えになつてしかるべきだ、ということになりました。あなた様のために生き、鼓動している一つの心臓を軽んじることがおできでしょうか。あなた様に相応しい者になろうと私は、お父君の玉座にあなた様をご推戴いたすのに血と命を捧げました。優しい愛の絆であなた様をその御位みくらひに留めるご奉公を私にさせて下さい。玉座と御心を分かち合おうではありませんか。玉座はあなた様のもの、御心は私のものと。さすれば私の幸運を死すべき定めの人の子の運命の遙か高みに引き上げてくださることになりましょうぞ。リブツサ姫はこの弁舌を聞くといかにも乙女らしく淑やかにふるまい、顔かほを面紗で覆つて、頬をいやが上にも染めた柔らかな恥じらいの紅をその下に隠した。彼女は口を開くことなく、ヴラドミル侯に退出するよう手で合図をした。いわば、彼の結婚申し込みにどんな回答をするべきかよく考えたい、といった様子で。

やがて大胆不敵なミジスラ騎士が、ご引見を賜りたい、と申し出、招じ入れてくれるよう要請した。謁見の間入室するなり、彼はこう口を切つた。「女性君主のうちでこの上なく魅力的な御方様おんかた。飛禽類ひきんの女王、麗しの鳩君きみは、あなた様にはよくお分かりのように、もはや独りでお嗜きにならず、お相手を探さねばならなくなりました。お話の趣きを拝借いたしますれば、高慢ききな孔雀が極彩色の羽根を鳩君のお目にひけらかし、その羽根の輝きで彼女を眩惑させよう、と思つております。なれど鳩君はご賢明で慎ましくおいでで、尊大な孔雀などは夫婦めおとになりませんまい。我欲の強い兄鶴は、以前には肉食の猛禽でしたが、その本性からすっかり解脱げだつつかまつり、おとなしく善良、また素直にもなり申した。なぜならこやつ、麗しの鳩君を恋慕い、連れ合いになつて戴けたら、と念願しているからでござる。こやつが曲がつた嘴と鋭い鉤爪を持つているからといって、惑わされてはなりません。こやつはその恋人、麗しの鳩君が羽根一本損なわれぬよう、その統治の座を揺るがされぬよう、守護するためにそれらが要りようなのです。なにせい、こやつは彼女に誠実で猷身的、鳩君ご即位の日に真つ先に忠誠をお誓いしたのですから。ご聴

明な国主様、さあ、お聞かせ下されい、柔和な鳩君は忠義者の兄鶴に、こやつが憧れ止まぬ愛に値するとお認めなさいますやいなや」。

リブツサ姫は前と同様、同じく騎士に退出するよう合図した。そしていくらか彼を待たせておいたが、それから二人の競争者を部屋に呼び寄せると、こう語った。「高貴な騎士様がた、父上クロクスが誉れ高くお被りになっていたボヘミア君主の冠を、父上亡きあと手にするのにお二人がご貢献下さったこと、まことにありがたく存じております。して、お二人の精励^{かつえ}恪勤^{かつかん}を私に思い出すように、とのことではありますが、決して忘却はしておりませぬ。また、ご両人が慎ましやかに私に愛を寄せて下さっておられますことも気づかなかったわけではございませぬ。眼差^{まなざ}しや物腰はとつくからあなたがたの思いのたけの通辞でしたもの。でも私があなたがたに心を閉ざしておりましたこと、愛には愛でお応えいたしませんでしたことを、つれない心根^{こころね}とお考えにならないで。それは侮辱無礼ではなく、選択を決めかねるといふ慎重なお知らせでしたの。私、ご献身^{こけん}ぶりを量ってみました。そして吟味する秤の指針は釣り合せて動きませんでした。それゆえ、お二方の運命の決着をあなたがたご自身に委ねよう、と心を定め、私の心をどちらがお取りになるのか、謎めいた林檎に託して差し上げました。分割できない贈り物をご自分のものになさるだけの分別とお知恵を、あなたがたのうちどちらが余計お持ちなのか見つけるために。さあ、即刻おっしゃってくださいまし、どちらが林檎をお持ちですの。それをお相手から手に入れたかたが、今この時以降私の玉座と私の心を賞品としてお取りあそばしますように」。二人の競争者は驚いて目を交わし、蒼褪め、黙りこくった。長いこと経ってから漸くヴラドミル侯が沈黙を破って言った。「物分りの悪い者にとつて賢者の謎は菌無しの口の中の胡桃同様、鶏が砂の中から掻き出した真珠同様、目の見えぬ人間が手にした明かり同様でござる。おお、国主様、お怒りにならないでください。我らがあなた様の贈り物を使うことも評価することもできませんんだことを。我らはそれと見抜けなんだあなた

様の意図を誤解し、我らの間に不和の林檎を投げ込まれ、我らを反目と果し合いに駆り立てようとなさったのだ、と思いました。そこでどちらも自分の持ち分を放棄し、お互い相手に独占を許さないでいる軋轢あつれきの果実を厄介あつれきしたのです。「あなた方ご自身が裁決をお下しになったわけです」と姫は答えた。「たかが林檎なものもお二人の嫉妬を燃え上がらせたのであれば、君主の冠に巻きついている桃金嬢てんにかの花冠89をめぐつてとなれば、どんな闘いをなさったでしょうね」。こう言い渡すと彼女は騎士たちを引き下がらせた。こちらは、賢くない仲裁人の言うことに耳を傾けてしまい、花嫁を我が物にし、指に指環を嵌める手段だったのに、その愛のあかしを無思慮に投げ捨てたことを大いに嘆き悲しんだ。さて、それでもどうすればもくろみを成就し、ボヘミアの国冠を、その魅力的な所有者もろとも計略なし腕力で、ちよろりと、もしくは、強引にものにできるか、彼らはそれぞれ別別に分かれて思案した。

一方リブツサ姫は、猶予期間として与えられた三日間を無為に過ごすことなく、国民に男の公を、自分に配偶者を、思い通りに選んで授けよ、とのうるさい民衆の要求にどう対処するか、一心不乱に考え抜いた。彼女は、ヴラドミル侯があえて無理やり迫るのではないか、あるいは少なくとも国君の地位を奪おうとするのではないかと心配した。必要が愛に援助の手を延べ、彼女に、快い夢のようにしばしば考えて楽しんだある計画を実行するよう決意させた。だってね、どん



な人間にだって、何もすることがない一刻、お人形を相手にするみたいに追っかけまわす幻想が頭の中に出没するところがあるもの。魚の目を切除したばかりで、きつい靴を履いた女の子にとって、堂堂として快適な豪華馬車を思い描くより素晴らしい時間潰しはありはしない。冷たい美女は自分の足元でどこぞの伯爵が吐息を洩らすのを夢見るのが好き。見栄っ張りのご婦人は宝飾品を並べ立てる。富籤狂はロットの四本組み合わせの当たり数字を当ててる。債務者拘置所に拘留されている者は大いなる遺産にありつく。贅沢三昧の連中はヘルメスの秘法を掘り出す。そして貧乏な木樵は中が空洞な樹に宝物を見つかる。こういったことはなるほど夢幻には違いないが、それだってひそかな楽しみに耽ることができなのだ。予言者の能力は昔から燃えるような空想と相い携えているもの。従って麗しのリブツサはこの気持ちの良いお友だちのおしゃべりに時時耳を傾けることもあった。そしてこの親切な仲良しさんはしょっちゅうあの若い獵師の姿を見せて彼女を愉しませてくれた。彼はいつまでも消えることのない印象を乙女心に残したのである。空想力が彼女に、簡単に実行可能だ、とうまいことを言って押しつける何千もの腹案が脳裡に浮かんだ。ある時にはこんな計画を立てた。愛する若者を暗闇から引っ張り出し、軍に入れ、栄誉ある階級を次次に上らせる。それから空想に任せて大急ぎで月桂冠を彼の頭に巻きつけ、栄光と勝利とともに彼を戴冠させて、玉座を楽しく分かち合う。またある時にはお話の筋書きを書き換え、いとしい人に武者修行に出で立った遍歴の騎士の装束を着けさせて自分の宮廷に連れて来、ヒュオンのような存在に変えてみたり。彼女だって、寛大なオーベロンがその被保護者に授けてやった魔法の道具に事欠かないのだから。でも思慮分別が乙女らしい慎ましやかな意識を再び統御し、英知の光が魔法の角灯の多彩な姿を艶消しにすると、美しい夢はどこへやら。さてそうになると、こんな企てを始めたらなんという無鉄砲をしかすことになるか、嫉妬と羨望が大貴族たちの反感を煽り、不和という非常警報が暴動と謀反開始の合図を出そうものなら、国土と住民になんとこの災厄を招来することになるか、彼女はあれこれ思い巡らすのだっ

た。そういうわけでリブツサ姫は胸の慕情と願望の数を、様子を窺う者どもの鋭い目から注意深く押し隠し、外には何も顕さなかった次第。

けれども民衆が男性の君主を求めている現在となると、事態は別の様相を呈した。肝心なのはただ彼女の願いを国民の要望と一致させることだけ。リブツサは雄雄しい決意で勇気を新たにし、三日目になるとありつた金の金銀の装身具を身につけ、頭には桃金娘の花冠が目もあやに輝いた。うちそろって花冠を飾ったおつきの乙女たちを従え、意気高く、穏やかな威厳を見せて、国君の玉座に上る。周りに集まった騎士と封臣は、姫の愛らしい口から、彼女が心と玉座を分かち合おうと決心した幸運な若殿の名を馳き取ろうと耳を澄ませた。「我が民のうちの貴族の皆さん」と彼女は一座に語りかけた。「そなたたちの運命の籤はまだ封じられた壺の中に手を触れられずに入っております。皆さんがたは、手綱も轡くわをつけられず、すらりとした背せなに鞍の負担も騎り手の重みも負うていない、牧で草食はむ私の駒たち同様自由の身です。私に配偶者を選ぶようそなたたちが認めた猶予期間が、もしや、そなたたちに君臨する男性の君主が欲しいとの熱い願望を冷まし、かような企ては落ち着いて吟味するもの、と説得したのであれば、それを今私に告げるべきでしょう。それともそなたたちはまだこう考えたに固執しているのですか」。一瞬彼女は口を噤んだ。しかし、群集の間に沸き起こった興奮、全議員の身振り手振りと合わせたざわめきと囁きが、すぐさま彼女にはつきりした結論を知らせた。そして例の代弁者だいべんしやが、男性の公選出という申し合わせは依然としてそのままである、との決定を確認した。「よろしい、それでは」とリブツサ。「籤で決めます。私は何も保証はいたしませんよ。ボヘミアの国に男性君主を選び定めたのは神神なのです。この君主は叡智と正義を以てこの国を統治するでしょう。この若い杉はまだがっしりした檜の樹たちを凌いで聳え立ってはおりませぬ。森の木木の間隠れて生い育っているのです。ありきたりの灌木に囲まれて。なれどこの杉はすぐに枝を拡げてその根に蔭を与えるでしょう。そしてその梢は雲居くもい

にまで届きましようぞ。

そなたたちのうちで委員会をお作りなさい、民の中の貴族の皆さん、お仲間から十二人の誠実な人をお選びになつて。して、その方は国君を急いで探しに行き、玉座へとお供するように。私の愛馬が道を教えてくれます。その方の前を跑足だくあしでのびのびと走って。それから、派遣された探し物をどうして見つめるか、その目印ですが、憶えておいてください。神神がそなたたちに君主として選り定めたその殿方は、そなたたちが近づいた時に食事を摂っています。鉄の食卓に向かい、野天の一本離れて立っている樹の蔭で。この方に忠誠を誓い、そのお体に国君の位を示す権標をおつけするのです。私の白馬がその方を背に乗せ、この宮廷へとお連れし、その方は私の夫にしてそなたたちの主君となります」。

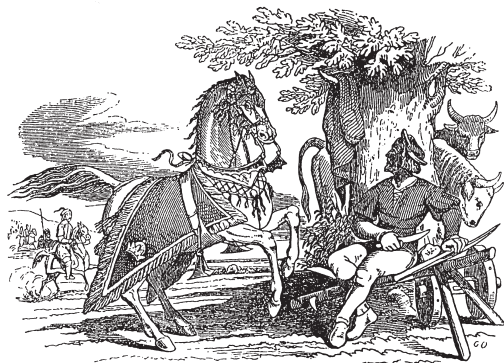
彼女はこう言って、花婿の到着を待ち受ける花嫁によくある、晴れやかな、けれどもやはり恥じらった物腰で会議をあとにした。この話をだれもが訝いぶかしがったが、そこにありありと表れている予言の精神が、民衆が盲目的に信じ込み、思索家だけが詮索する、神神の託宣のように人人の心を打った。儀仗隊が選出され、姫の純血の愛馬が、さながら回教寺院モスクへ行くトルコ皇帝を乗せるためかのようにアジア風に豪華な馬鞍ばくをつけ、飾り立てられて準備を調えた。物見高い民衆が群がり集まり、歓呼の声を挙げる中、騎馬行列が動き出し、白馬が誇らしげに先頭を速歩で進んだ。けれど間もなく行列は観衆の目から姿を消し、見えるものといったら彼方に舞い上がる砂塵だけになった。なにしろ意気盛んな馬が街中から野外に出るとすぐさま息を弾ませ、英国の競馬騎手のように猛然と速駆けを始め、その結果代表団の騎馬隊は随いて行くのがやっという有様になったからである。この敏速な疾走者は見かけは勝手にさせられているようだったが、実はなんだか目に見えない力がその足並を制御し、手綱を操り、脇腹に拍車を当てていた。リブツサ姫はかねてから母親の妖精から受け継いだ摩訶不思議な資質によって馬を調教するわざをわきまえていた。

で、白馬は道から右にも左にも逸れず、迅速な足取りでその目的地に向かってひた走った。そして姫は、今やなにもかも諸願成就となりそうなので、これからのことを愛情籠めてわくわくしながら待ち望んだ。

一方使者たちはしたたかに急がされた。彼らは坂道を何哩も何哩も上ったり下ったり、ヴルタヴァ河⁹⁶やラベ河を泳ぎ渡ったりした。やがて胃袋が昼飯のことを思い出させたので、彼らはまたしても、姫君の託宣によれば、自分たちの新しい国君がそれに就いて食事をしている、という不思議な鉄の食卓のことを考えて、これにさまざまな批評やら注釈やらを施したものだ。ある生意気な騎士は同行者に向かってこう言った。「どうもな、我らが女公様は我らをおちゃらかしているように思えてならぬ。彼女に一杯喰わされているのではないかと申すのも、鉄の食卓で飯を食う男がボヘミアにいるなんて、これまで聞いたためしがあるうか。こうして疾走しておるのが何の役に立とう。罵りと嘲笑を受け

るのが関の山ではあるまいか」。しかしもつと分別のある別の騎士は、その鉄の食卓なるものはなにやら比喩的な意味があるのかも知れない、もしかすると自分たちは、諸国を彷徨う仲間の習慣に倣ってどこかの野の木の下^{もと}に憩い、質素な昼食を鉄の盾の上に拵げた遍歴の騎士に出会うのだろう、との意見を述べた。三番目は戯れに曰く。「おれは心配だな。この道は真つ直ぐキユクロプスどもの工房に下って行って、おれたちは鉄床^{かまど}かなんぞの上で飯を食つとる足萎え^{あしな}のウルカヌス⁹⁷か、それとも奴の助^{すけ}つ人^{ひと}あたりを、我らがウエヌス様のとこに連れてくんじゃないか」。

こんなお喋りをしているうちに彼らは、遙かに差をつけて前を走っていた先導



者の例の白馬が、耕されたばかりの畑を速歩で横切り、一人の農夫の傍にびたりと止まったのを見て、びっくり仰天した。飛ぶように急いで近寄ってみると、その農夫は、野生の梨の樹の木蔭で、ひっくり返した犁すきに座り、食卓代わりになっているその刃の上で黒麵包パンをぱくついているところだった。この男は綺麗な馬が気に入った様子で、愛想よく相手をし、食べ物を出すと、馬はその手からむしゃむしゃ喰った。使節団は確かにこの光景にひどく驚かされたが、にも関わらず代表者たちのだれ一人、自分たちが探している男を見つけたのだ、ということ疑わなかった。彼らは恭うやうやしくその傍らに寄り、そのうちの最年長者が口を切つてこう言った。「ボヘミアの女公が我らを遣わされ、こうお伝えでございます。耕す犁をこの国の玉座と、牛追い棒98を国君の笏しゃくとお取り替ええそばされよ、というのが神神の御心みこころと御旨みめいなのです、と。女公はあなた様をもろともにボヘミアを治める背の君にお選びです」。若い農夫はそんなことは思いも掛けなかつたので、皆が自分をからかおうとしているのだ、と考えた。とりわけ、人人が自分の恋の秘密を推察して、弱みを嘲弄しようとしに来たんじゃないか、と誤解したので。そこで、嘲りには嘲りで応じよう、といくらか喧嘩腰でこう返答した。「さて、あなたがたの公国がこの犁ほどの値打ちがありません。もし国君が百姓ほど腹一杯食えず、百姓ほど愉しく飲めず、百姓ほど安らかに眠れないなら、ボヘミア国をこの肥沃な耕地と、あるいはこの滑らかな牛追い棒と取り替えるのは、まことそれだけの骨折り甲斐はありません。と申すのも、一杓ひとすくの塩でも一樽の塩と全く同様私の食物に風味をつけられるのではありますまいか」。すると十二人の一人がこう返事した。「光を忘み嫌おぼろう颯さつは地面の下で食料の虫けらを求めて土を掘ります。なぜなら昼の光に耐える目を持たず、すばしこい麋ものように走るように作られた足がないからでございます。殻で覆われた蝸かきがたは湖や沼地の泥の中を這い回り、最も好んで棲まうのは川の岸辺の木の根や灌木の林の中です。なぜなら泳ぐための鱗うろこを持ち合わせていないからでございます。そして鶏閉けいいに閉じ込められた鶏は低い粘土の塀さえよう飛び越えようとはいたしません。な

せなら小胆過ぎて、空高く舞い上がる鶴のように己が翼を信頼できないからです。見るための目、歩くための足、泳ぐための鱗、飛ぶための翼が備わっておいでなら、あなた様は颯のように土を掘ったり、鈍重な甲殻類のように沼地に身を隠したり、あるいは家禽の殿様のようには堆肥の山のでっぺんで時を告げたりなさらず、昼の光に進み出、走り、泳ぎ、あるいは雲居まで飛翔なさることでしょう。自然があなた様にどうという賜物たまものを授けたかに応じてな。かように申しますのは、進取の気性に富んだ男性は今あるがままの自分には満足せず、これからなり得る自分になろうと努力するものだからです。それゆえ神神がお勧めのご身分になられるよう試みられよ。さすれば、あなた様はこのポヘミアの国が一モルゲン99の耕地との交換に値するやいなや、ご判断できましよう」。

戯れの嘲弄とは到底認めがたい使節のこの真剣な演説、それから更にまた、使いの者たちが自分たちのまことの使命の証拠、信用状100として持ち出した国王の権標、つまり緋の衣、笏、そして黄金の剣は遂に疑っていた農夫の不信を克服した。突然彼の心にはと閃くものがあつた。リブツサ姫が彼の胸の想いを察し、彼の真心と変わらぬ心根を、隠されたものを洞察する彼女のわざを用いて見届け、それに彼が夢にも思わなかつたやりかたで報いてくれようとしているのだ、というわくわくするような考えが目覚めたのである。彼女の託宣によって彼に約束された予知の能力のことがこの時再び彼の意識に上つた。そして彼は、今でなければ二度と再びこの能力は発現しないに違いない、と考えた。すぐさま彼はもらった榛はらみの棒を握り、深く畑に差し込み、植樹するようにその周りに柔らかい土を盛り上げた。するとなんと、たちどころに棒から芽が出、膨らみ、葉と花のついた枝を張つた。けれどそれらの緑の枝のうち二本は萎なえ、枯れた葉っぱは風に弄もてあそばれた。三本目はそれだけ一層遅く成長し、数数の実をつけた。その時恍惚とした農夫に予知の精霊が降り、彼は口を開いて、こう述べた。「国主リブツサ様とポヘミア人のお使者のかたがた、予知の精霊の息吹に吹かれて未来の霧が晴れ渡つた、名誉ある騎士ムナタの子プリミスラス101の言葉を聴かれい。そな

たたちは犁を操っていた男に、その一日の仕事が全うされぬうちに、公国を操る柄を握るよう指名した。ああ、犁が耕地の境界石に至るまで畑を畝で覆っておればなあ。さすればボヘミアは未来永劫自主独立の国家であり続けたであろうに。そなたたちが犁で耕す男の仕事を妨げるのが早すぎたので、お国の国境は隣国に分かたれ継承されるであろう。そして遙か未来の後裔は隣国に従属し、いつまでも変わることなく併合されるであろう。芽を出し青青と枝葉をつけたこの棒の三本の枝葉は私の腰からの三人の息子たちをそなたたちのご主君に約束するもの。そのうち二人は未熟な若枝として早早に枯れ凋むが、三人目は公国の位を受け継ぎ、彼を通じてのちの孫たちという実が熟すであろう。なれどいずれば山地を越えて驚が飛んで来て、この国に巢食う。一度は飛び去るが、再び戻って来る。さながら己の所領であるかのように。だがそれから犁で耕す男の友なる神神のご子息が出現し、彼を奴隷の鎖から解放してくれる。後世の人人よ、憶えておくがよい。そうなればそなたたちは自らの運命をことほぐことであろう。なぜならこの神神のご子息は迷信という龍を足下に踏みにじり、満ちて行こうとする月に腕を伸ばして雲から引き下ろし、自身慈愛溢れる天体としてこの世を明るく照らしてくれるからだ」。

厳かな代表たちはいぶかしみつつ肅然と佇み、予言者を押し黙って身じろぎもせず驚き見つめた。さながらいづれかの神が彼の口を通じて語っているかのようだった。さてプリミスラスはというと、使節たちに背を向け、骨の折れる仕事の伴侶だった二頭の白い牡牛に向き直り、繋いでいた軛から解き放ち、畑仕事から解放し、自由を与えてやった。すると牛たちは喜んで草の生い茂った耕牧地をあちこち跳ね回っていたが、やがて軽やかな霧が空に流れ去って見えなくなるように、見る見る薄れて消えてしまった。プリミスラスは農民の履く木靴を脱ぎ捨て、近くの小川に行つて身を清めた。高価な衣装を着せられ、騎士として剣帯を締めて剣を佩びると、黄金の拍車もあてがわれた。それから彼が颯爽と白馬にまたがると、馬はおとなしく乗せるのだった。これまでの所有物を残して去ろうという段

になった時、彼は使者たちに向かい、脱ぎ捨てた木靴をあとから持つて来て、きちんと保管しておいて欲しい、民衆のうちで最も卑賤だった者がかつてポヘミアの最高の位に推戴されたのだ、とのあかしとして、また、自分の後継者が取得した高貴な地位を鼻に掛けることなく、その起源を心に銘記して、元來の出自である農民身分を尊敬し、保護するようお願いの出のよすがとして、と言いつけた。ポヘミアの諸王が戴冠式の際一足の木靴を見せられる、という古い慣わしは昔これから起こったのであり、プリミスラス朝が消滅するまで長い間守られた。植樹された榛の榛は成長して実をつけ、周囲に広く根を張り、数数の新たな若芽を生んだので、とうとう耕地全体が榛の森と化した。これはこの区画を共有地に編入した最寄の村の住人には勿怪ちがひの幸いとなった。と言うのは、この村落はこうした不可思議な植林を記念して代代のポヘミア王から、いかなる土地の査定があつても一ネーゼルの榛105の実以上の税を納入しなくてよい、との認可状を下付されたからである。なんとも素晴らしいこの特権は、話によると、今日に至るまで子子孫孫に享受されているそうなる(3)。

今や誇らかに自分の女主人の許に婿君を運んで行く喜びの駒106は風よりも速く思われたが、それでもプリミスラスは、もつともつと駆り立てよう、と時々黄金の拍車を当てた。彼にはこの疾走でさえ亀の歩みのように思えたのである。七年経つてもその姿がまざまざと魅惑的に彼の脳裡に揺曳よぎしている麗しのリブツサにまた面と向かつて逢いたい、という欲望はそれほど熱烈だったのである。それも花作りの彩り豊かな花畑に咲く飛び抜けて美しい秋牡丹アキモトを眺めるといった単なる目の保養ではなくて、勝利の栄冠に輝く恋の至福の結合のためなのだ。彼が考へるのはただただ桃金娘の花冠のことだけ。これは相思相愛の者たちの価値基準では王冠などの遙か高みに輝くもの。そしてプリミスラスが国の統治権と愛とを量り較べたとしたら、リブツサ姫のいないポヘミア国を載せた秤皿は高く跳ね上がったことだろう。両替商の黄金計量秤の皿に載せられた縁を削られたドウカーテン金貨108がそうなるように。

新たな君主が意気揚揚とヴィシエフラトに導き入れられた時、太陽は既に沈み始めていた。リブツサ姫は、未来の背の君の到着が伝えられた折、丁度遊苑にいて熟した李すももを摘んでいたが、宮廷の女官たちを全て従えて淑やかに迎えに出、神神がお世話下さった花婿として彼を受け入れ、いたしかたないという風情を作り、自分の心の選択を目に見えない諸力の意志の中に覆い隠した。宮廷中の目が大層物見高くやって来た青年に向けられた。彼らは眉目秀麗なすらりとした男性としか思わなかった。外見そとみの体型という点からすると、胸の内で自分と相手を較べて、なぜ神神は控えの間に伺候している者たちを退けたのか、こんな褐色に日焼けした犁で耕す男の代わりに、なぜ紅頬の勇士をうら若い女君主のために共同統治者にして臥床ふとどの伴侶として選ばなかったのか、理解しかねる、と思った宮廷人は何人もいた。特にヴラドミル侯とミジスラ騎士からは、自分たちの要求を断念したのは不承不承なのだ、という様子が容易に看取れた。そこでリブツサ姫にとって肝要なのは、神神の行いが正当であったことを証明し、郷土ムスカイプリミスラスが光輝に満ち満ちた血統は持たないにしても、それは明らかな知性と慧敏さというもつともな代償で償えることを周知させることだった。彼女は素晴らしい饗宴を用意させ、それは客人を手厚くもてなす女王デイド109が昔敬神の念篤いアエネアスを接待したものに全く引けを取らなかった。歓迎の大杯ヴァイルコンメンがせつせと口から口へと回され、憂いを払う玉箸はばきが哄笑こうしょうと上機嫌を煽り立て、既に夜の一部分が戯れごとや気晴らしに過ぎ去ってから、リブツサは、謎謎遊びをいたしましょう、と提案した。そして隠された物事を当てるのは元来彼女の得意だったから、話題になった謎を解いては全ての列席者を娯しませた。

自分も謎を出す順番が来ると、彼女はヴラドミル侯、ミジスラ騎士、そして郷土プリミスラスを呼び寄せて、こう言った。「雄雄しい皆さん、今度は私の謎謎を解く準備をなさって下さい。あなたがたのうちでどなたが一番賢く、一番分別がおありか、はつきりするように。皆さんがたお三人全員にこの小さい籠の中の物を贈り物に差し上げたい、

と存じました。私がお庭で摘んだ杏ですわ。あなたがたの内のお一人は籠の半分とそれからもう一つ、次のかたは残りの半分とそれからもう一つ、三番目のかたはまたまた残りの半分とそれからもう三つお取りになるの。さあ、そうしますとね、籠は空っぽになります。おっしゃって下さいな。一体今いくつ杏が入っているのでしょうか¹¹⁷。せっかちなミジスラ騎士は果物の入っている小籠を目測、問題の趣旨を天性で考えずに言うことには「偃月刀^{サイベル}ですっぱりとけりがつく代物でござらば、それがし立派にけりをつけてお目に掛けましょうぞ。したが、あなた様の謎は、優渥^{ゆうあく}なる国主様、それがしにはからくりが細か過ぎます。それでもそれがしご要望に応え、運を天に任せてあてどもなく一投げつかまつる。数え上げれば籠には全部で一シヨック¹¹⁸の杏が入っておる、と存じまする」。「投げそこないましたね、騎士様」とリブツサ姫。「その数を今一度それだけ〔その数の二倍〕と、この小籠に入っている数の半分と三分の一、それから更に五つ加えなければならぬとしましょう。そうしますとそれは丁度六十に六十からその数だけ足りない数を増した数になりましょう¹¹⁹」。ヴラドミル侯は、この謎を解けば財務総監の地位にありつける、とでもいうかのよう¹²⁰に、長いこと骨を折って計算していたが、やっとこさこの面倒な数字の集計を四十五と宣言した。またしても姫曰く「もしその数とその数の三分の一と半分と六分の一を足しますと、私の小籠の中には丁度四十五に四十五からその数だけ足りない数を増した数があることになりましょう¹²¹」。

例の無学なK**＊レンベルクの会計同業組合^{ギルド}より髪¹²²の毛一筋だけでもその技倆に長けているごく月並みの算数教師でもこの問題を雑作なく解き明かしたことだろうが、できの悪い計算者にはどうしても予知能力が必要なのである。賢いプリミスラスは幸いにもそれを授かっていたので、謎を解明するのにわざと努力も不要だった。「天界のもろもろの力と仲良くお遊びになるおかた」と彼は口を切った。「あなた様の高く羽ばたく崇高なお考えを探り出そうと心がける者は、それが雲居に隠されていれば、鷲のあとを追って飛ばねばなりません。さりながらあなた様から光明を



与えられたこの目が耐えられる限り、隠されたあなたの飛翔に随き従ってまいるつもり。私の判断では、この小さいお籠の中に数にして三十の杏をお隠しです。それ以上でもそれ以下でもなく」。姫はにこやかに相手を見つめて言った。「そなたは灰の中に深く埋もれていた微かな余燼を見つけ出しました。闇と霧の中から光がそなたに輝き初めたのです。そなたは私の謎謎をお当てになりましたよ」。それから彼女は小籠を開き、ヴラドミル侯の帽子に十五個とそれからもう一つ杏を数え入れ、まだ十四残っている内からミジスラ騎士に七個と更に一つを与えた。そうするとこの可愛い果物籠にはまだ六個入っていた。その半分を彼女は賢いプリミスラスに分け、それから残りの三個も贈ると、籠は空になった。宮廷中の人人が麗しのリブッサの算数の知恵とその利口な婚約者の慧敏さに大いに感嘆した。人間の機知が、一面では、ありきたりの数字をこும்不可解に言葉に組み込むことができ、また一面では、こும்着実にその数字をなんとも巧みな隠し場所から選び出すことができようとは、だれにも呑み込めなかった。姫は彼女の愛に与らなかつた両騎士に空っぽの籠を下賜した。はかなく消えた恋愛沙汰の思い出のよすがとして。撥ねつけられた求愛者のことを、やつこさん、女から籠をもらいやがった、という慣わしは、これに由来して今日まで続いているのである。

全員が臣事の誓いと婚儀の準備を調べてから、二つの祝典が絢爛豪華に執り行われた。かくしてボヘミアの民は男性の公を、そして麗しのリブッサは背の君を得、両者いずれもその望み通りだったわけ。これは讚嘆すべきことで、策略が効を奏したお蔭である。この策略は普通必ずしもリブッサ姫が極

めて巧妙な周旋人だなどということにはなっていない。とは申すものの、両者のどちらか一方が騙されたというのであれば、それは少なくともお利口なリブツサではなくて、民衆である。どっちみちまあこれはよくあることなのだ。ボヘミア国はその名の通り軍隊を率いて進む公を戴いたが、統治権は従来と変わらず女性の手に握られていた。プリミスラスはおとなくして妻の言うことをよく聴く夫の正真正銘の見本で、女公に家政でも国政でも抗ったことは一度もなかった。彼の考えと望みは同じ調子に調律した二つの弦のように妻のそれと完全に共鳴した。手を触れられない弦も高らかに響く弦の奏でる調べを進んで真似るのだった。けれどもリブツサは、自分は大出身の配偶者だと看做されたがって、幸せにしてやった哀れな奴にその後驕り高ぶってなにかにつけて卑賤な身分を思い出させるようなご婦人がたの高慢で見栄っ張りの気質は持ち合わせなかった。彼女が模範としたのはあの名高いパルミラの女性であって、ゼノビアのように自分の善良なオデナトゥスを卓越した精神的
能力で支配したのであった。

この幸福な夫婦は変わらぬ愛を享受しながら、心と心をつなげる本能が、昔の世界の壁をあれほど堅固に仕上げた接合剤とモルタルのよう
にしっかりと長続きのする当時の習俗に従って暮らした。プリミスラス公はすぐにその時代の最も勇猛果敢な騎士となり、ボヘミアの宮廷はドイツで最も輝かしい宮廷となった。気がつかぬうちに数多くの騎士と貴族、それから夥しい民衆がこの国の至るところから集まって来たので、
城下町は住民にとって狭過ぎるようになった。そこでリブツサは役人たちを招集、真昼時に最も賢明な歯の使い方を心得ている男を彼らが見つ



けるその場所に、都市を建設しよう命じた。役人たちは出かけて行って、定め時刻に丸太を鋸で二つに引き切ろうとしている一人の男を発見した。一同は、仕事にいそしんでいるこの男こそ真昼時鋸の歯を、お偉方の食卓で食物を噛み砕くのに歯を使っている食客どもとは比較にならないほど見事な用い方をしている、と判断し、女君主が新しい都市の建設を指示した場所を見つけた、と疑わなかった。そこで彼らは野原のその区域を犁の刃で掘ってぐるりを囲い、市壁の大きさの目印をつけた。鋸で切り分けた用材で何を作ろうとしているんだね、との質問にその労働者は「プラーフ」⁽¹²⁾と返答した。これはボヘミアの言葉で、しまい「意味」である。そこでリブツサは新都市をプラハと命名、これなんぼヘミアのウルタヴァ河畔の世にも名高き王都ブラークである。その後子孫に関するプリミラスの予言は正確に実現した。彼の奥方は三人の若君の母となったが、そのうち二人は夭折、しかしながら三人目は成長して、この人からボヘミアの玉座に数世紀に亘って栄える輝かしい王朝が芽生えるのである。

原注

(1) ……こうしたこと全てが善意からのもので無償だった

クロックス Cross は男系の継嗣を持たなかった。没する時に残したのは三人の娘たちで、いずれも彼自身と同じく予知のわざに長けており、メディアやキルケのように魔法に通じていた。長女のベラは魔法の植物の使用にかけてはメディアに似ており、これに対し、誕生の順番はこれに次ぐテチャ(テルバ)は呪文を意のままにすることにおいてキルケと競合した。両者のいずれにも途切れることのない相談者の流れが向かい、そのうち少なからぬ数が恋人と仲直りをしようがためであり、また、健康を再び手に入れた者たち、失った財産を取り戻そうとする者たちもあつた。……前者はベリーナの町を、今一人はテーティスの町を得た金で——つまり彼女たちは何事も無報酬ではやらなかったからだが——建設させた。こうした点で末の妹リブツサはずっと気高い心根の持ち主であることを示した。すなわち彼女は何人からも金品を強要することなく、全体には公共の未来を、個人にはその人間だけに関わりのある運命を姉たちより正しく予言してやったのである。こうした高貴な志操のため、また彼女が、無報酬であつたばかりでなく、予言の才能を大切にして(姉たちに較べ)間違いもずっと僅かだったので、彼女は極めて高く評価され、その結果——父親のクロックスに代わって——王に選ばれた。

ドウブラヴィウス⁽¹²⁾

(2) ……にもかかわらず追っ払おう

なるほど不承不承に退きはしたが、叛乱の元凶はこう言った。子を産んだことのないあの牝牛めを快適な牧場から早いところ無理にでも追い出さねばならぬ。あれがその地位を自ら進んで諸侯の一人に譲渡しようと思えぬならな。

(3) ……今日に至るまで子孫孫に享受されているそう。

アエネアス・シルヴィウスは、カール四世が交付した更新されたこの特許状を自身目にした、と断言している。すなわちかくのごとし。

ローマ皇帝にして、皇帝シギスムンドゥスのご子息カール四世の王国書類の特許状の中に私は見た。彼ら——すなわち当該の町の住民——に、自今当該の樹の実は僅かな量以上の年貢貢納を命じられることはない、との特権が付与された、と。

訳注

(1) リプツァ Libussa. チェコ語リプシエ Libise. チェコの伝説上の人物。七世紀頃(史実ではそんなに古くはない)ボヘミア君主国プシエミスル Přemisl 朝を創始し、首都ブラハ Praha (ドイツ語プラーターク Prag) の建設を予知した、とされる超能力を持つ女性。

(2) ヨハネス・ドゥブラヴィウス Johannes Dabruvius. かつてモラヴィア(チェコ語モラヴァ Morava, ドイツ語 Mähren, ラテン語、英語モラヴィア Moravia) の首都で要塞だったオロモウツ Olomouc (ドイツ語オルミューツ Olmitz) の司教(一五五三)。ラテン語で『ボヘミア史』 *Historia Bohemica* を著す。何度も新版が発行された。リプツァの物語は三十三巻の同書のうち第二巻で語られている。ムゼーウスは僅かな細部を除いてはこれに従っている、とのこと。これに反し、訳注5に挙げられている書からは小さな逸話が引かれているだけだそう。

(3) ボヘミア Böhmen. ラテン語、英語ボヘミア Bohemia. モラヴィアとともに現チェコ共和国を形成。ドイツのバイエルンと西部を接し、ザクセンと北部を接し、ポーランドのシレシアと北東部を接し、モラヴィアと東部を、下オーストリアと北部を接する。面積およそ五万二千平方キロ。首都ブラハはチェコ共和国の首都でもある。

(4) アエネアス・シルヴィウス Aeneas Silvius. エネア・シルヴィオ・ピッコロミニ Enea Silvio Piccolomini (一四〇五—一四六四)。人文学者、神学者。枢機卿を経て、教皇ピオ二世となる。当該書籍は神聖ローマ帝国皇帝フリードリヒ三世(一四一五—一四九三)の秘書官として勤務していた間に著したものである。

(5) 『ボヘミア人ノ発祥ト事跡』 *De Bohemorum origine ac gestis Historia*. ラテン語の著書。リプツァの物語はこの著述の第六章、第七章で語られている由。

(6) ボヘミア森 Bohmer Wald. 現在はボヘミア(ベーメン)とドイツのバイエルン地方との間の山地がこう呼ばれている。最高峰一四五八メートル。ヴァーナーヴァルト(ウィーン森)やシユヴァルツヴァルト(黒森)なども連想されるが、こうしたヴァルトというのはかならずしも全

てが樹木の密生した場所ではなく、町や村、耕地が点在する緩やかな起伏の丘陵地帯と考えた方がよい。

(7) どっしりした粘土から捏ね上げられた人間「エホバ神土の塵を以て人を造り、生氣^{いのちいき}其の鼻に嘘^{ふきいれ}入たまへり」(旧約聖書創世記第二章第七節)。

(8) 樹の精 Dryade.ギリシア神話のドリュアス。あるいはハマドリュアデス。古代ギリシア人は、森、河川、山や洞窟、海にはこれらを司る女性の精霊であるニンフが棲んでいる、と信じていた。このうちで森のニンフであるドリュアスを除いては不死。しかし、ドリュアスは樹木とともに生まれ、樹木を住処としているので、宿っている樹木が死ねば死んでしまう。そこで古代ギリシアでは、理由なく樹木を伐採するのは不信心な行為とされ、甚だしい場合には罰せられた。

(9) ウンガールント公チエフ Herzog Czech von Ungerland. チエフのドイツ語綴りは普通 Czech でチエヒという片仮名表記に近い。ここではチエコ語の発音に近い片仮名表記にしてみた。チエコの伝説によれば、チエフ Czech はチエコ人の最初の指導者とのこと。チエヒ Czechy (チエコ) という土地名は彼に由来している、というわけ。十四世紀の未詳の著者の手になる最古の、そして民族感情に満ち溢れているチエコ韻文年代記に、一三二〇年までにボヘミアへチエフが到来した、と記されている由。「ウンガールン」Ungarn、つまりハンガリアであるうか。

(10) クロクス Kroks. ドゥブラヴァイウスはラテン語で Coccyus と記している。これだと「クロックス」との片仮名表記の方がより近い、と思われる。しかし、チエコ人のある記事は Kroks と記しているので、「クロクス」で統一する。また、上掲の記事では、彼の三人の娘のうち上の二人の名が カジ Kazi および テタ Teta と記されていて、困惑させられる。

(11) 盾持ち 貴族出身で騎士見習いの少年のこともいうが、ここでは騎士の身の回りの世話をし、戦いの折は兵士として騎士に随^つう平民出身の従士。

(12) アスケレビオス Askulap. ギリシア神話の医神。ローマ神話では訛つてアエスクラピウス。詳しくは J・K・A・ムゼーウス著鈴木満訳・注・解題「屈背のウルリヒ」(『武蔵大学人文学会雑誌第三十七卷第二号所載)の訳注を参照されたい。「アスケレビオスの息子たち」というのは練達の男性医師のこと。彼らは当然ながらある種の予兆を基に病気をあらかじめそれと診断できる。そして自身に死が訪れる場合もそれを予測しうるわけである。

(13) 火口 火打石で打ち出した火を移し取る燃え易い繊維の塊。転じて、非常に良く燃えるもの、他に火を点けるもの。

(14) 神酒 Nektar. 大神ゼウスを始め重要な神はオリュンポス山の頂きの宮殿に集い、いつ果てるともない饗宴を楽しんでいる。その神神の食べ物にはアンブrosia、飲み物はネクターと呼ばれる。

(15) 精霊 Genien. ゲーニエン、単数形ゲーニウス Genius。ゲーニウス genius は古代ローマの民間信仰によれば、ローマ人男性が一人一人持っている守護精霊。ローマ人女性が持っている守護精霊はユノ Juno。従って「精霊一般」の意味で用いるには無理があるう。

- (16) あんよはお上手の紐 幼児の歩行練習用の紐。
- (17) 山鶉 Rehuhn. ヨーロッパ山鶉。
- (18) 例の嘘をつかない飾『グリム以降のドイツ昔話』の編者として有名なバウル・ツァウナートはヤーコプ・グリムの『ドイツ神話学』を引用して、これを注釈している。〔 〕内は訳者の補足。
- 中世以来広く行われた飾かざりばせ Siebtreiben あるいは飾かざり直し Siebtrehan は、だれだか分からない犯罪者を見つけ出すために、賢い女たち wise Frauen 「古代ゲルマンの巫女の末裔的存在。賢明な古い女と考えればよい。決して邪悪ではない」あるいは魔女、男の魔法使いによって行われたが、れつきとした人人が採用することもあった。女は豆飾を両手の中指の間に挟んで、呪文を唱え、疑わしい者たちの名を呼んで行く。犯人の名を口にした時、飾は揺れ始め、回転するのである。
- (19) 評判高いシールバハの聖マルティン der renommierte St. Martin von Schierbach. これについてはムゼーウス自身が匿名で出版したその著書『観相学的旅行、まずは観相学的日記』 *Physiognomische Reisen, vorn ein physiognomisches Tagebuch* (一七七八—一七九。四分冊)でこう言及している。「使徒のころにシールバハの聖マルティンは、その行ったところまざまま不思議な奇蹟のほかに病気の牝牛をその影によって癒した」。シールバハの聖マルティンは未詳。手元の大部なエルナおよびハンス・メルヒヤース著『聖者大全』にも見当たらない。ムゼーウスが創作した聖人であろう。聖マルティン、あるいは聖マルタン、聖マルティヌスと言えば、フランスのトールの司教だった「トールの聖マルタン」St. Martin de Tours (三二六—三九七/四〇一)のみである。十一月十一日が祝日で、この日の前夜に行われる子どもたちの提灯行列はドイツ語圏のカトリック教地域でも楽しい習俗となっている。フランスの守護聖人。
- (20) デルフォイなるアポロン神の鼎。ギリシアのバルナツソスの峰の麓デルフォイのアポロンの神殿の奥には青銅の鼎状の床几があり、これにはピュティアと呼ばれるアポロン神に仕える巫女が座り、大地の割れ目から噴き出る冷気を吸って神懸かり状態になって、神託を下した、といわれる。デルフォイはゼウス大神に次ぐ声望あるこの偉大な神に対する信仰の中心として大いに繁栄した。
- (21) ラベ河 Elbe. チェコで最も長い河。ドイツ語エルベ Elbe、ラテン語アルピス Alpis、チェコ語ラベ Labe。ポーランドとチェコの国境を形成するスデーテン山地の一部リーゼンゲビルゲのボヘミア側に源を発し、ボヘミア盆地に流入、プラハを貫流して来たヴルタヴァ Vltava (ドイツ語モルダウ Moldau)。ムゼーウスはムルタウ Murtau と記している。河を合せて、チェコとドイツのザクセン地方の国境を形成するエルツゲビルゲを横切ってドイツに入り、沿岸にドレーステン、マクデブルク、ハンブルクの諸都市を眺め、北海に注ぐ。全長一五四キロ、うちドイツ領内七三八キロ。

(22) 白鳥の歌 瀕死の白鳥は美しい声で啼く、という昔からの言い伝えがある。芸術家の最後の名作。辞世の詩句、遺言。

(23) 恋煩いの男 Seladon フランスの文人オノレ・デュルフェ Honoré d'Urfé の長編牧歌小説『アストレ』Astore (一六〇七。死後の出版) の主人公セラドン Seladon のこと。繊細で上品な羊飼いで、セラドンはアストレと相思相愛だが、二人が清らかな恋を全うして遂に結ばれるまでさまざまな障害で隔てられる。しかしセラドンは終始一貫恋人に対する誠実さを変えない。現代人の目から見ると、彼は優柔不断で不器用な内気な恋人であるに過ぎないようだが……。

(24) メディア姫 Eriphila Medea ムゼーウスは Medea と綴っているが、ドイツでは普通 Medea である。巨船アルゴーに乗り組んで、黒海の奥の王国コルキスまで、黄金の羊の皮衣を取りに出かけたイアソンを頭とする五十人のギリシアの勇士の物語に登場する。この薬草学に通じたコルキスの王女は、イアソンに一目惚れし、その激しい愛を成就させるため、黄金の羊の皮衣を万難を排して手に入れてやるばかりか、父王アイエテスの追跡を逃れるため、実の弟を殺して海中に投じる。ギリシアに帰ってイアソンと結婚したメディアは、イアソンのために王位篡奪者である彼の叔父をまたしても煮殺してしまう。これだけ尽くしたのにも関わらず、共にコリントスに逃れた夫イアソンがその地の王の娘クラウサに恋して、これと結婚しようとする、毒を塗った衣をクラウサに贈り、惨殺する。そしてイアソンとの間にもうけた二人の子どもをイアソンの面前で刺し殺し、龍に牽かせた車に乗って逃亡する。アイスキュロス、ソフォクレス、ピンダロス、エウリピデスなどの悲劇の女主人公である。また、愛児たちを殺す場面を描いたドラクロアの「怒れるメディア」は有名。

(25) エーテル ギリシア哲学で天空に充滿する靈氣とされたもの。

(26) ツィヒムやオヒム Zihim und Ohim. 『ドイツ人の民話』の注釈者ノルバート・ミラーはルター訳ドイツ語聖書の Der Prophet Jesaja. Das 13. Kapitel. 19-21 を引用、そこにはツィヒムとオヒムがこのように出ている。
: sondern Zihim werden sich da lagern, und ihre Häuser voll Ohim sein.
しかし手元のルター訳では以下の通り。

sondern Wüstenhäre werden sich da lagern, und ihre Häuser voll Eulen sein.
ツィヒムは砂漠の獣に、オヒムは梟に対応している。

旧約聖書イザヤ書第十三章第十九節―第二十一節にこうある。「十九すべての国の中にてうるはしくカルデア人がほこり飾となせるパピロンはむかし神にほろぼされたるソドムゴモラのごとくならん二十ここに棲むもの永くたえ世々に至るまで居るものなくアラビヤ人もかしこに幕屋をほろぼす牧人もまたかしこにはその群をふさすることなく二十一猛獸かしこにふし吼るもの其の家に満ち駝鳥かしこにすみ牡山羊かしこに躍らん。第二十一節は口語訳では以下の通り。

かえって、ハイエナがそこに伏し
家々にはみみずくが群がり
駝鳥が住み、山羊の魔神が踊る。

となると、「ツイヒム」は鬻狗ウツク、「オヒム」は木梟キウに当たるようだ。

(27) キルケ Oike. 『オデュッセウス』に登場する魔女。太陽神ヘリオスとテイターンの一人クレイオスの娘ベルセイスとの間に生まれた。同腹の兄弟にはメディアの父であるコルキスの王アイエテスがいる。つまりキルケはメディアのおばに当たる。彼女の鳥アイアイエに流れ着いたオデュッセウスの部下たちはほとんどキルケに衣服盛られて豚に変えられてしまう。オデュッセウスはヘルメス神の助言のお蔭でこれを免れたばかりか、部下たちも元の姿に戻させ、髪美しいキルケの望みに応じて共寝をし、歓待されて一年間アイアイエに滞在する。

(28) 四大 万物を形成するとされた四つの元素、地・水・火・風。

(29) 凱旋戦車に繋いでいる 古代ローマではローマ軍に打ち破られた国の王族などをローマで開催される凱旋式の折、戦車チャリオットに繋いで勝利を誇示するのが習慣だった。

(30) ナバル Nabal. 極めて裕福なカレブ人。王となる前のダヴィデが、武力によるその保護の代償として貢納を要請したのに、これを大層無礼に拒んだ、と言う。「けちん坊、しみつたれ」の代名詞。旧約聖書サムエル前記第二十五章第二一三十七節。

(31) 大貴族 昔のハンガリアやポーランドの大貴族のこと。ムゼーウスはボヘミアの大貴族にもこの呼称を用いている。

(32) 鹿 Reh. のろ、のろじか、くじか。角の小さいすらりとした小型の鹿。大きな枝状の角を持つ堂堂としたヒルシュ Hirsch とともに中部ヨーロッパではお馴染みの鹿。秋になると肉屋の店頭にぶらさがっていたりする。

(33) 弩 太い強靱な弦（鋼鉄、あるいは鯨の鬚、あるいは縊り合わせた繊維）を一種の巻き上げ装置で引き絞り、これを掛け金に引つ掛けておき、その前の溝に短かく太い矢（円筒状の木製の矢柄に鉄の鎌が付いている）を嵌め込む。引き金を引くと掛け金が外れ、弦が猛烈な勢いで矢を弾き、射出する。銃の先端に小型の弓を水平に仕掛けられた形をしている。台の部分は木製。多くは楹。フランスでは九世紀以降、ドイツでは十二世紀以降使用された。二五〇歩の距離でも鎧を貫通した、と言う。イングランドやウエールズの六尺フィートの長弓（櫛で作る）とどちらが勝っているか、おもしろい議論になるだろう。単位時間に何回射撃が可能か、で比較するなら当然後者が優越するわけだが。

(34) エウロペ Europa. ムゼーウスの書いている通りの綴りから「オイローバ」であり、これがヨーロッパの語源とのこと。ローマの詩人オウィディウスの『変身譚』によれば、彼女は地中海の東岸フェニキアの見目麗しい少女だった。これに心をそそられた大神ゼウスは雪白の牡牛に化けてそこへ降り、少女と仲良しになった。無邪気なエウロペは綺麗で人懐こい牛にすっかり心を許し、とうとうその背に乗った。すると牡

牛は少女を乗せたまま沖へ泳ぎだし、遙かな海を渡ってクレテの島まで連れて行った。ここでゼウスはエウロペとの間に三人の息子をもうけた、という。ミノス（子孫交代クレテの王となった）、サルペドン、ラダマンテスである。

(35) 尺^{スズリ} ドイツの昔の尺度。五〇―八〇センチ。腕の長さを基とした。

(36) 福音書であらものつそりと……座り込んでいる牡牛 新約聖書ヨハネの黙示録の第四章の記事を指す。ヨハネはこんな光景を見たそうなの。天に玉座があり、そこに座っている方がおられた。玉座の周りに二十四の座があつて、そこに黄金の冠をかぶった二十四人の長老たちが座っていた。玉座の中央と周りに四つの生き物がいた。それらの前にも後ろにも一面に目があり、またそれらが生やしている六つの翼の周りにも内側にも一面に目があつた。第一の生き物は獅子のよう、第二の生き物は若い牡牛のよう、第三の生き物は人間のような顔を持ち、第四の生き物は鷲のようだった。これらの生き物は昼も夜も絶え間なくこう唱えていた。

聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、

全能者である神、主^シ。

かつておられ、今おられ、やがて来られる方。

確かにちよつとろんざりさせられる生き物たちのようですね。

(37) ポーランド国会 中世期東ヨーロッパに広大な版図を持っていたポーランド王国が、中央集権を果たすことができず、結局オーストリアや近隣に勃興したプロイセン、ロシアに蚕食され、遂には分割（第一次分割一七七二年、第二次分割一七九三年、第三次分割一七九五年）されて王国自体が消滅（第三次分割による）してしまったのは、一五七二年以来貴族が国王を選出するという選挙王制に変わったため、外国の貴族や国王が王位に就いたりし、諸外国の干渉を受け易くなったのが最大の理由だが、国としての意思統一ができにくく、国政がしばしば紛糾混乱したのは奇妙な国会規則に責任がある。ポーランド王国国会の規定によれば、いかなる法律も満場一致で可決されねばならなかったため、国会の行動機能を停止させるにはたった一票で充分だったのである。これをリベルム・ウエト *liberum veto*（ラテン語。「ウエト」は「我は禁ず」の意。自由な拒否）自由拒否権^注 と言う。ポーランドにおいて国会構成員各自が保有していた、異議申し立てによつて議決を阻むことができる権利。一六五二年初めて遂行され、一七六四年まで専横に行使された。五十五国会中発動されたのは実に四十八回にも及ぶ。

(38) 沢鷲 *Wiedj* 鷲鷹科の猛禽。全長五〇―六〇センチ。雌の方が大きい。中型の鷹。アジア北部からヨーロッパにかけて繁殖。ドイツ語 *Wiedj* は「狩る者」の意。

(39) ヒュドラ *Hydra* ヘラクレスの十二の功業の一つに頭のたくさんあるヒュドラ退治がある。これはレルネの地に棲息する水蛇で、頭を切っ

てもすぐ新しいのが出て来る怪物だった。ヘラクレスは甥のイオラオスを連れて行き、イオラオスはヘラクレスが蛇の頸を切断すると、その切り口を火で焼いて新しい頭が生えるのを防ぎ、かくして殺した。

(40) 緋の衣 高位聖職者、王、皇帝の衣装。紫衣。

(41) ヴィシェフラト Vizegrad. ドイツ語綴りに従えば、片仮名表記はヴィツェグラートとなる。チェコ語綴りでは Visehrad。「高い城」の意。片仮名表記はチェコ語に從った。プラハの下方(南)、重重しく滔滔と流れるウルタヴァ(ドイツ語モルダウ)河の右岸(東側)にある。現在このこしい巖の上は公園、墓地、聖ペテロ聖パウロ教会となっているが、かつては壮大なスラヴの時代を物語る灰黒色のヴィシェフラト要塞があった。ボヘミアの伝説ではこの巖上がボヘミアの君主たちの最初の城ということになっている。プラハのヴィシェフラトは実際十世紀後半と十一世紀にはボヘミアのプシエミスル朝の諸君主の重要な居城であり要塞だった。この城の最盛期はボヘミア公で後に初代ボヘミア王(二〇八五)となったヴラティスラフ二世治下の十一世紀の最後の三分の一である。ヴラティスラフは弟の司教ゲーバルトとの確執のためプラハ城からここへ引き移り、ここに十一世紀末司教座礼拝堂(現在聖ペテロ聖パウロ教会に属する。プラハで最も古いロマネスク建築)を建立した。これはプラハの司教ではなく、直接教皇に從属した。一時ヴィシェフラトは閑却されたが、プシエミスル朝最後の王ヴァーツラフ三世が一三〇六年殺され、男系嗣子が絶え、その父ヴァーツラフ二世の娘婿でドイツ王ハインリヒ三世の王子ヨーハンがボヘミア王となり(ルクセンブルク朝の始まり)、ヨーハンの長子カレル一世(ドイツ王、のち神聖ローマ帝国皇帝カール四世)が、ボヘミア王として戴冠する者はヴィシェフラトの麓に赴き、ここを戴冠式の出発点としなければならぬ、と定めると、再び脚光を浴びた。

(42) サルマティアの諸侯たち die sarmatischen Fürsten. 本来サルマティアというのは、古代のヴィスワ河とカルパティア山脈の向こうの東ヨーロッパを指す。ここは今日でも「サルマティア低地」Sarmatische Tiefebeneと呼ばれている。この地を流れている河川はドニエプル、ブク、ドニエストル、ドン、ヴォルガである。ギリシャの歴史家の記述を総合すれば、紀元前六一四世紀頃この地方で遊牧、紀元一世紀頃まで黒海北岸で活躍した騎馬民族がサルマティア人。サルマティア人の国家は後期アレクサンドリア時代スキティア人の国家を滅ぼし、三―四世紀にゴート人に打倒された。ただし、ポーランド人はしばしばドイツ人からサルマティア人 Sarmaten と呼ばれるので、ムゼーウスは漠然とポーランドの諸侯あたりを考えていたのか。

(43) ソロン Solon. 紀元前六四〇頃―五五九。アテナイの立法者。いわゆるギリシアの七賢人のうちで最も有名。

(44) 二頭の獅子の間に座す英明なソロモン Salomon. 旧約聖書によれば、父ダヴィデの跡を継いで紀元前十世紀頃イスラエルの王となったソロモン(シエロモ)はその知恵と栄華で有名。ソロモンの富についての旧約聖書の記述のうちにその玉座はどのように描かれている。「王又象牙をもて大なる宝座を造り純金を以て之を蔽へり。其宝座に六の階級あり。宝座の後に円き頭あり。坐する処の兩旁に扶手ありて扶手の側に二の獅子立てり」(列王記略上第十章第十八―十九節)。

- (45) クラクフ Kraków。ドイツ語ではクラカウ。ポーランド語クラクフ Krakow。ここでは片仮名表記はポーランド語に従う。ポヘミアに近いポーランドの由緒ある都市。確かに伝承によればヴィスワ河畔のこの古都の歴史はクロクスと結びついている。一〇〇〇年頃にはポヘミアに属していた。次いでポーランドの諸侯ポレスラフ・クロドリ Boleslaw Chudry (九九二—一〇二五) に征服され、クラクフ司教座所在地となり、十二世紀にはポーランドのある地方侯国の中心であった。一時またポヘミアに帰属した(一二九〇—一三〇五) こともあるが、一三二〇年から一五九〇年までポーランド諸王の王都であり、一三二〇年から一七六四年までポーランド国王が戴冠し、その墳墓の地となる都市だった。
- (46) ヴラドミル Wladimir。チェコ語ではミは普通使わず、外来語に僅かあるのみだが、ムゼーウスはこう綴っている。
- (47) 蜜蜂 膜翅目蜜蜂科の昆虫。働き蜂の体長一〇—一五ミリ。一匹の女王蜂と少数の雄蜂がいて、他の多数の働き蜂は元来雌だが生殖能力がなく、花蜜や花粉の採集、蜜の貯蔵、営巣、育児を行う。
- (48) 雀蜂 膜翅目雀蜂科の昆虫。大型蜂で体長約四〇ミリ。腹端に毒針を持ち、毒は強烈。
- (49) 宿敵の獅子 はて、蜜蜂の不倶戴天の仇といえは、A・A・ミルン『ウィニー・ザ・ブー』(熊のプーさん)でも分かるように、甘い物好きの熊公のはずだが……。果たしてライオンが蜜を好むやいなや。
- (50) 蜜を貯めた樹 中が空洞になっている大木は蜜蜂には絶好の巣作りの場所となる。
- (51) 丸花蜂 膜翅目蜜蜂科の昆虫。形、習性もミツバチに似ているが、それより大きくて肥っている。働き蜂も体長一五ミリに達する。
- (52) 夢魔 Alp。ナハトマール Nachtmahr (英語ナイトメア nightmare) とも。民間信仰によれば、眠っている人にのしかかり、息もつけないほどに押さえつけて苦しめる不定形の魔物。もともと、眠る前の食べ過ぎ・飲み過ぎ、身につけているきつ過ぎる着物、暑苦しい空気、過重な心配事などがこうした幻想を生むおおよその原因であろう。しかしこれに襲われて窒息して死ぬこともあるらしい。
- (53) 遣る瀬無く焦がれる羊飼ひ 牧歌小説のセラドン(注23参照)のような類型を指す。
- (54) ミジスラ Mieszko。ドイツ語読みならミツイスラという片仮名表記に近いだろうが、チェコ語の発音にしておく。ただし、このような人名はチェコには無いようである。
- (55) 方尖塔 一個の巨大な石材から刻まれた、上に行くほど細くなり、先端が金字塔状に尖っている長細い石柱。古代エジプト特産。太陽神崇拜の象徴。二本が対となって邸宅、神殿の門、墳墓の扉の前に立てられた。帝政ローマ時代かなりの数がローマに運ばれた。ポポロ広場(ピアッツァ・デル・ポポロ)などにある。エジプト太守ヘメット・アリ(一七六九—一八四九)によってフランスに贈られたラメセス二世のオペリスクは一八三一年以降パリのコンコルド広場(プラス・ド・コンコルド)に立っている。トトメス三世が紀元前一五〇〇年頃太陽神の神殿都市アヌ(その後ギリシヤ人にはヘリオポリスと呼ばれた)に建立した二本のオペリスク(いわゆる「クレパトラの針」)は、一本がニューヨークのセントラル・パークに、もう一本が一八七七年ロンドンに運ばれた。こちらはテムズ河畔、テムズ北岸通り(テムズ・エンバンクメント)、

ホテル・サヴォイの近くに屹立している。

(56) プリタニアの我侷な娘とその母国との内輪喧嘩 アメリカの十三の植民地とプリテン王国との戦争、つまりアメリカ独立戦争（一七七六一八三年）。ムゼーウスの『ドイツ人の民話』全五巻は一七八二—一七八六年の出版だから、はっきりとはしないが彼の執筆期間とこの戦争とはかなり重なり合っているはず。

(57) ドイツの雄雄しい息子ら 英国がその陸兵不足（陸兵は法律上強制徴募が許された水兵とは異なり、建前は志願制。従って恒常的に陸兵は不足していた。各教会区から籤で選ばれた男たちから成る国民軍は数に不足はなかったが、本来国土防衛軍であるため、本人たち、および議會の承認が得られなければ、海外派遣がでなかつた）を解決するため、ドイツの領邦国家の君主に多額の金を払い、その軍隊をいわば傭兵として賃借し、大陸での戦闘に送ったことは有名。いくつもの領邦君主が徴募兵士を訓練して英国に売りつけた。ヘッセン・ダルムシュタットの方伯、ルートヴィヒ九世（一七一九—一七九〇）は特に悪名高いが、彼の弁護をすれば、祖父エルンスト・ルートヴィヒと父ルートヴィヒ八世が強大なフランス王国のルイ十四世の真似をして、このちっぽけな侯国を借金まみれにしてしまったからである。ルートヴィヒ九世はプロイセンのフリードリヒ・ヴィルヘルム二世（軍人王）を模範として、味気ない儉約な軍隊式生活を送り、侯国に再び健全な財政状態をもたらした。

(58) ヴェーザー河 Weser 北西ドイツを北流して北海に注ぐ河。延長四八〇キロ。ヴェッラ河とフルダ河が合流してヴェーザーになるが、ヴェッラ川まで入れれば延長七五六キロ、内四八〇ないし五四八キロが舟航可能。フルダ河畔にはヘッセン侯国の首都カッセルが、北海への流入点にはヴェーザー・ミュンドウングがあつて、その間には多くの都市、町、村が栄えている。その代表を挙げれば、ヴェーザー・ミュンドウングから一二四キロ上流、プレーメンの外港プレーマース・ハーフェンからなら六八キロ上流に中世以来の大商工業都市、貿易都市プレーメンがある。これに流れ込む支流や運河から成る網の目状の内水面を動脈とすれば、これは北西ドイツの大動脈である。

(59) クロエ Chroa 二つでは一般に「恋人の女性」の意味で用いられている。元来はギリシアの文人ロンゴスによつて書かれた牧歌小説『タフニストクロエ』（二世紀末）の可憐で無垢な羊飼いの少女。

(60) 気高い勇士の群が祖国ドイツに帰還する 大陸に派遣されたドイツの領邦国家の兵士たちは、英国陸軍が降伏すると、あるいは敗戦の混乱で部隊がばらばらになると、やむを得ず、あるいは自ら進んで、現地の女性たちと通婚、土着した例も少なくないようだ。ドイツに帰還しなかつた兵士もいるわけ。

(61) 美しいイタケの王妃 ペネロペイア。イタケの島の王オデュッセウス（ラテン語ウリクセス）の貞淑な妻。トロイア戦争の将領の一人として出征したが、トロイアの陥落後も海神ポセイドンの憎しみを買い、二十年間海洋と島島を放浪した夫の帰還を待ち通した。彼女の美貌とその夫の財産を狙う夥しい求婚者たちをなんとかあしらひながら。

(62) ウリクセス Ulys, ウリクセス Ulixes はオデュッセウス Odysseus（民間語源説では「憎む」の意）のラテン語名。リウイウス・アンドロニ

- クス(紀元前三八年在世)が初めて『オデュッセイア』(『オデュッセウスの詩』の意)をラテン語に訳し、ローマ人の文学の源泉とした。以来オデュッセウスはラテン語名ウルクセス(Ulixes)でも知られるようになった。なお、この古典ラテン語の表記・発音は中世通俗ラテン語になると、ウリッセス(Ulysses)になったようである。これが更に訛って英語ユリシーズ(Ulysses)となる。
- (63) プラトンの愛情関係 プラトン(Platon)(紀元前四二八/四二七—三四八/三四七)は古代ギリシアの哲学者。アテナイの人。ソクラテスの弟子。精神的愛情関係を説いた。ただし男性間の。けれども現今「プラトニック・ラヴ」といえば肉欲を離れた精神的な男女間の恋のことである。
- (64) 花粉路 Staubweg. 未詳。どなたかご高教を。
- (65) ガルテンツヴァイルン Gartenzwirn. 蔓草のたぐいであるが未詳。
- (66) 寸 昔の長さの単位。二、二—三センチ。現代ではインチと同じとされ、二、五—四センチ。
- (67) 純潔なウエスタの巫女 ウエスタル。ローマ神話のウエスタはギリシア神話のヘステイアと同じく公私の竈を司る女神で極めて重要な存在。ローマのこの女神の神殿には常に聖火が燃えていて、いずれも高い家柄出身の六人の純潔な処女の巫女(女祭司)がそれを守っていた。この聖火の保存はローマの安寧と不即不離の関係にある、とローマ人は信じていた。従ってウエスタルが男性と関係を持つなどということは、いわば国家に対する大逆罪であった。巫女の任期は三十年で、それが終われば結婚することも自由だったが……。
- (68) マルター 昔の穀物の容量単位。一〇〇—七〇〇リッター。
- (69) テミス Themis. 「置き定められたもの、掟、法」の意。ギリシャ神話の法と正義の女神。
- (70) 農夫 Landesaß. 「ラントザース」とは普通ドイツ中世の小作農のことを指すが、話の趣からすると、ここでは自由農民らしい。
- (71) 獵人 Nimrod. ニムロデ、ニムロド。ノアの息子ハムの息子クシの息子。つまりノアの曾孫。勇敢な獵人。「クシ」ニムロデをうり彼始めて世の権力ある者となれり。彼はエホバの前にありて権力ある獵夫なりき是故にエホバの前にある夫権力ある獵夫ニムロデの如しといふ諺あり(旧約聖書創世記第十章第八—九節)。彼はバビロニア王国を建設した、とされている。転じて、狩人、狩猟好き、狩猟狂。
- (72) ソルプ人 Sorber. ヴェンド人 Wender. ドイツ東部・北部に住んでいた(現在でも少数残っている)スラヴ系民族の総称。十八世紀当時でも、その地方のドイツ人には差別視されていたようである。
- (73) ツォルネボック Zornbock. ムゼーウスは『ドイツ人の民話』第一部の最初の物語「三姉妹の年代記の諸巻」Die Brüder der Chronika der drei Schwestern (鈴木満訳『リューベツァールの物語——ドイツ人の民話』(国書刊行会、二〇〇三年)所収「三姉妹物語」)の敵役としても登場。やはりボヘミアに侵攻しようとして、リブッサのために一敗地に塗れ、リブッサに魔法の武器を与えられた騎士のために殲される、というところになっている。更に同書の注(参の巻注五三)をも参照のこと。
- (74) 黄金の拍車 黄金鍍金の拍車は騎士の象徴。騎士に叙任された時与えられる。ちなみに盾持ち(騎士見習い、従騎士)は銀の拍車を付ける。

- (75) 英雄アキレウス Achilles der Held. ミュルミドン族の王家の出身ペレウスは海の女神の一人テティスとの間に男の子アキレウスをもうけた。テティスは息子を不死身にしよう、と考え、一説では、人間の子として死すべき部分を夜な夜な火の上にかざして焼き取った。また一説では冥府の川ステイクスの水に漬けた。いずれにせよ、テティスは子どもの踵を手で握ってこの施術を行ったので、手で覆われた踵は不死とはならなかった。「アキレス踵」(急所、弱点)という言葉はここから生まれたのである。その後アキレウスはトロイア戦争に参加、トロイアのプリアモス王の長子でトロイア一の英傑ヘクトルを殲すなどの豪遊振りや、素晴らしい脚力、そして、パリスの矢に踵を射られての死が、ホメロスの『イーリアス』で描かれる。
- (76) 例の三柱の有名な女神たちが……ある羊飼いに頼んだ。いわゆる「パリスの審判」で、トロイア戦争の原因である。ペレウスとテティス(注75参照)の婚儀はオリュンポスの神神が臨席して行われたが、その際招きを受けなかった争いの女神エリスは、ヘスペリデスの園から黄金の林檎を一個取って来て、饗宴の場に投げ込んだ。これには「一番美しい女神へ」と記されてあったとも、投げ込みながらエリスがそう叫んだともいずれにせよ女神たちの間には早速争いが始まったが、結局最も自信のある三柱の女神たち、つまりゼウスの妃で権勢あるヘラ、凜凜しいアテナ、そして当然ながら自分こそ思っている美と愛の女神アプロディーテのどれか、ということになった。だれがそうなのですか、と女神たちから責められたゼウスは、賢明なのでもちろん自身裁定を下すことを避け、これをイダの山で羊を牧していた少年パリスに委ねた。パリスは実はトロイアの王プリアモスの次子。出産の際母ヘカベは、自分が炬火を産んで、それがトロイアの町中を焼き尽くす夢を見た。そこで父プリアモスはこの不吉な子を死なせようとして山に棄てたのだが、牝鹿がこれを養ったので、いたしかたなくイダの山で羊飼いをさせていたのである。三柱の女神たちは装いを凝らして少年の前に出たが、それぞれそかに贈り物を約束し、裁定を有利に導こうとした。ヘラは、世界の支配権を、アテナはあらゆる戦での勝利を、そしてアプロディーテは世界一の美女を与えよう、と申し出た。そして若いパリスは最後のものに惹かれ、アプロディーテこそ黄金の林檎を受けるに相応しい、と断言した。アプロディーテがパリスに約束した美女は、スパルタ王メネラオスの妃のヘレネで、パリスが彼女の心を奪い、ともども王宮から逃れてトロイアに去ったのだが、これがギリシア勢がこぞってトロイアを攻め、トロイアがヘカベの夢のように灰燼に帰す原因となったことは言うまでもない。
- (77) 係争物件 Objektum litis. ラテン語 obiectum litis をムゼーウスはドイツ語風に綴っている。「争いの対象」。ローマ法の専門用語。
- (78) 領邦 Gespanschaft. ムゼーウスはハンガリアの行政区 (マジャール語 varmegye、すなわち「城の管区」) を表すドイツ語を借用しているようである。「諸侯領」「藩領」。
- (79) 月桂冠 勝利の徴。
- (80) 公のいねえ軍隊 原文 ein Heer ohne Herzog. 「公、公爵」に当たるドイツ語 Herzog は元来「軍、軍隊」Heer を「率いる」ziehen 人の意。
- (81) 紡錘 糸紡ぎの大事な道具。糸を巻きつけるとともに繰りをかけるのに用いる。糸紡ぎは女性の仕事とされたので、紡錘は糸巻き竿ことも

に女性の象徴、代名詞でもある。

(82) 兄鶴 Sparber. 鷲鷹科の猛禽。中型の鷹。はたか 鶴は雌で兄鶴は雄。ともに鷹狩りの鷹として用いられるが、鶴の方が大きい。ここでは譬えられているのが狩猟狂のミジスラ騎士なので、あえて雄の和名を選んだ。

(83) 鷲木泉 Dhü. 泉科の大型の鳥。全長約六六センチ。大きな耳角を持つ。

(84) 野雁 Trappe. 野雁科の鳥。全長雄一メートル、雌七五センチ内外。体は肥大し、嘴は大きく短く、体形は七面鳥と雁の中間。

(85) 大雷鳥 Auerhuhn. 雷鳥科の鳥。逞しい体格で、六一七、五キロの重さ。ムゼーウスはその男性形 Auerhahn をこゝから用いている。

(86) 鶴 Storch. 鶴科の鳥。全長一〇センチ、翼開張二メートルに達する。体は純白で、翼の大部分は光沢ある黒色。長い脚は赤い。ヨーロッパ産の亜種はシユバシコウといい、子どもを守る愛情の深い鳥として知られ、また、人間の赤ん坊を運んで来る、という民間信仰がある。

(87) 青鷲 Rauber. 鷲科の鳥。全長約九〇センチ、翼を開くと一五〇センチを超えるものもある。嘴は黄色で長い。体は白く、背中は青灰色。後頭部に青黒色の長毛がある。

(88) 比較的大きな鳥たち。以上の鳥は全てドイツ語では男性名詞。ムゼーウスはこの会議の面々が男性であることに読者の注意を向けさせている。

(89) 桃金娘の花冠。婚礼の時花嫁が髪に飾る花冠。純潔の象徴。

(90) ロット。数字の組み合わせによる富籤。

(91) 債務者拘留所に拘留されている者。近世のヨーロッパでは、負債が払えないで債権者に告訴されている者は、行政機関の執行吏に逮捕されて債務者拘留所に入れられた。債務を弁済すればただちに拘留を解かれる。この拘留処分は、本当に債務があるのか、あるとすれば返却がどの程度できるのか、を判断する裁判に確実に出頭させるための手続きなのである。

(92) ヘルメスの秘法。ヘルメスは古代エジプトの月の神トートのギリシア語名称。ヘルメス・トリメギストス Hermes Trimegistos (三倍も偉大なる)、あるいは、「この上なく偉大なるヘルメス」の意。トートは月を司る神ゆえに数と計量の神であり、そのため更に掟に従う世界秩序の神、知恵の神とされ、あらゆる教育、芸術、学問、特に錬金術と魔法の創始者ともなった。錬金術と魔法は「ヘルメスのわざ」と呼ばれた。古代エジプトの信仰によれば、トートは彼の叡智を数巻の書物に書き記した、とのこと。これを発掘して解読できれば世界の秘密に通じることになる(矢島文雄編『古代エジプトの物語』(現代教養文庫八三五、社会思想社、昭和四十九初版)に関連する物語が「サトニ・ハームス奇談」として収録されている)。

(93) ヒュオン Hion. 古いフランスの韻文詩の主人公騎士ヒュオン・ド・ボルドー Hion de Bordeaux。ムゼーウスの友人で、やはりヴァイマルにいたクリストフ・ヴィーラント(一七三三—一八一三)はこの詩を一七八〇年韻文叙事詩『オーペロン』Oberon に仕立て上げた。ヒュオンはカール大帝(シャルルマーニュ)に追放され、遍歴の騎士となって彷徨う。その途中妖精王オーペロンに逢う。オーペロンは彼に魔法の道具を

- くれる。角笛と、それから決して空にならない酒盃とである。ヒュオンはこれらの助けで彼に課された三つの難題を解決することに成功する。
- (94) 例の代弁者 リプツサ姫が語った鳥の譬を断には「目がよく見えない鷲木梟」が代弁者として登場するが、人間たちの動きではこれに対応する者をムゼーウスは描写していない。まあ、おそらく、もったいぶった老齢の高位聖職者あたりの役どころではあろうが。
- (95) 馬勒 馬具の一部で、手綱、轡、面繫（轡を飾るために馬の頭から頬にかけて絡んで結ぶ）の総称。
- (96) ウルヴァ河 Muldan. ムゼーウスはこのようにムルダウ Muldan と表記しているが、普通はモルダウ Moldau である。チェコ語ではウルタヴァ Uitava. ボヘミアのラベ（ドイツ語エルベ）河の主要な支流。全長四二五キロ。ボヘミア森に発し、南東に流れ、一キロの長さの狭い峡谷（いわゆる「悪魔の壁」）を貫流したあと北へ転じる。南ボヘミアのチエスケー・ブディエヨヴィツェ（ドイツ語ベームツシュ・ブードヴァイ）盆地を横切り、大抵は狭い峡谷を流れてプラハの下手に至る。それから平地に入り、メルニクでラベに合流する。プラハはこのウルタヴァ河の畔に築かれた都市である。
- (97) ウルカヌス Vulcan. ローマ神話の火の神、下つては鍛冶の神とされたウルカヌス Vulcanus、あるいはウォルカヌス Volcanus。ギリシア神話の片足の不自由なヘパイストスに当たる。ヘパイストスは愛の女神アプロディーテの夫として扱われることがある。『オデュッセイア』では戦の神アレスがアプロディーテと不義の恋をし、こっそり彼女の許に通うことになっている。ヘパイストスはこれを知り、透明で細く、極めて強靱な網をこしらえ、これを寝室に仕掛けておき、忍んで来たアレスを絡め取り、オリュンポスの神神の前で晒し者にするのである。このようにヘパイストスの宮殿はオリュンポスの高みにあるのだが、ローマ時代になると、ウエルギリウスやホラティウスの詩では、独眼の巨人キユク ロプスどもを助手として、シチリア島のエトナ火山などの噴火口内を仕事場に行っている、となつてゐる。
- (98) 牛追い棒 牛を使役する時牛の脇腹を突いて督促する突った棒。二でリプツサ姫が若者に与えた棒はこれである。
- (99) モルゲン 昔のドイツの地積単位。地方により異なるが約三〇アール。つまりほぼ三反（モルゲン）中に耕せる広さから。
- (100) 信用状 ムゼーウスは Kredenzbrief と記しているが、これでは意味をなすまい。Kreditbrief の誤りであろう。
- (101) プリミラス Primis. これはラテン語風の綴りなので片仮名表記もラテン語風にしておいた。ボヘミア生粋の君主の系統はプリシミスル朝（訳注1、および解題参照）と呼ばれるが、その縁起が農耕にいそんでいたこの若き郷士の名に基づく、というわけ。「プリシミスル」とは「熟慮する者、思案する者」の意（石川達夫著『黄金のプラハ』に拠る）とのこと。
- (102) 鷲 ドイツの紋章は鷲である。
- (103) 神神のご子息 神聖ローマ帝国皇帝、オーストリア皇帝ヨーゼフ二世（一七四一—一九〇）に対する啓蒙主義者ムゼーウスの敬意表明である。啓蒙専制君主ヨーゼフ二世は二十四歳で即位したものの、共同統治者として実権を掌握していた母である女帝マリア・テレジアが死んだ一七八〇年の末から、漸く親政を開始することができた。内政面での諸改革のため次々と法律を制定するが、とりわけ農奴制の撤廃、カトリッ

ク教会の世俗的権力の制限を実行したので、当時絶対主義君主制の変革が期待された。実際一七八一年公布された宗教寛容令により、カトリック教会との繋がり弱まり、ヨーゼフ二世が死ぬまでに約六千もの修道院が閉鎖され、その資産は国有化された。

(104) 満ちて行くこととする月 トルコ。オスマン帝国。その旗印は新月に星。もつとも既にその勢力は凋落しつつあった。これをヨーゼフ二世が「雲から引き下ろした」というのは、一七八〇年六月（まだマリア・テレジアは生きていたが）ドニエプル河畔でロシア帝国の女帝エカチェリーナ二世と会見、その後ペテルブルクにおいてオスマン帝国に対するオーストリア・ロシア同盟を締結したことを指すか。オスマン帝国のヨーロッパへの勢力伸張は一六八三年の第二次ウィーン包囲でその頂点に達した。これは三十五万の兵と三百門の大砲を動員した大作戦だったが、オーストリア軍は堅固な防備に拠つて攻撃によく耐え、やがてポランド王ヤン・ソビエスキーの率いる十万のヨーロッパ混成軍が参戦、ウィーン北方でトルコ軍と会戦して大勝利を収めた。オスマン軍はベオグラードまで撤退し、かくして第二次ウィーン包囲はトルコ側にとつて惨憺たる結果に終わった。

(105) ネーゼル 昔のドイツの容積単位。一般的には半リッター。

(106) 喜びの駒 君公の葬儀の際には柩の後からいよゆる喜びの駒に乗って、壮麗に飾り立てた騎者が随いて行ったものである。これは新たな統治者に対する国の喜びを表す。哀悼の徴として人の乗っていない、黒い覆いを掛けた馬が葬列の先導をした。これがいわゆる悲しみの馬である。

(107) 秋牡丹 *Aeneone* キンボウゲ科ニリンソウ属の多年草。高さ三〇センチ内外。赤、青、紫、白などの色がある。翁草、白頭翁。

(108) 縁を削られたドウカーテン金貨 一般の金銭授受の際金貨が刻印された額面通りに通用するなら、強欲な金持ちが手に入つた金貨の縁を目立たぬように薄く削り取ることもあつたわけ。一枚一枚ではごく僅かな量でも夥しい金貨にそのような手術を施せば、不当な利益は大きかつたであろう。ドウカーテン金貨は良質で有名な中世・近世の金貨。ただし十九世紀ドイツでは銀貨。

(109) 客人を手厚くもてなす女王デイド *Dido* 古代ローマの国民叙事詩ともいふべきアプリアス・ウエルギリウス・マロ *Publius Vergilius Maro* (紀元前七〇—一九) の『*アエネ이스*』*Aeneis* によれば、陥落したトロイアから父と息子を連れて唯一脱出に成功した英雄アエネアス(父はトロイアの伝説的建国者トロスの子孫アンキセス、母はアプロディーテ)は、難船して辿り着いたカルタゴで、女王デイドに手厚くもてなされ、善美を尽くした饗宴で接待された。デイドとは相思相愛の仲になるが、国家建設の使命感に燃え、その恋を振り切つてイタリアの地に渡る。デイドは巨大な火葬壇を築かせ、アエネアスの船を見送りながら自死自焚した。アエネアスはローマの南東にあつた都市国家ラティウムで、その王ラティヌスの婿となり、数数の武勲を立ててローマの始祖となる。

(110) 歓迎の大杯 *ヴイルコンメン* ドイツ語で「ようこそ」と言う意味でもある高い脚の付いた大きな酒盃。

(111) 愛いを払う玉筥 原文「*ハビ*を与えるもの。すなわち、酒。

(112) 一休今いくつ否が入っているのでしょうか 簡単な謎謎ですね。答はすぐあとに出て来ますが、肝心なのはそこに至る考え方です。これは代数

式を作らなくても答えを出すことができます。最後の者は、残りの半分ともう三個で籠が空になるのだから、「残りの半分」は当然三個なわけ。

つまり最後の者が貰うのは六個。ここから逆算すればよろしい。ただし数式にすればこうなる。
$$\frac{x}{2} + 1 + \frac{x}{4} - \frac{1}{2} + 1 + \frac{x}{8} - \frac{1}{4} - \frac{1}{2} + 3 = x$$

(113) ショック ドイツの昔の数量単位。六十個。

(114) その数を今一度それだけ……を増した数になりました。数式はこうなる。
$$2x + \frac{x}{2} + \frac{x}{3} + 5 = 60 + (60 - x)$$

(115) その数とその数の三分の一と……増した数があることになりました。数式はこうなる。
$$x + \frac{x}{3} + \frac{x}{2} + \frac{x}{6} = 45 + (45 - x)$$

(116) K**＊レンベルクの会計同業組合 ムゼーウスが匿名で著わした『観相学的旅行』の中に「カーレンベルク」として出て来る。カーレンベルク市民というのはどうやらラーレの市民、あるいはシルトの市民（双方ともドイツ中世の民衆本に出て来る愚か村の村人）の同類らしい。シルトの市民は自分たちの総数を計算することができなかった。数える者がいつも自分を数に入れることを忘れたからである。

(117) やっこさん、女から籠をもらいやがった「籠をもらう」 einen Korb bekommen (erhalten) というドイツ語の慣用句は「肘鉄（肘鉄砲）を喰らう」という慣用句に和訳するのが普通。このドイツ語の慣用句の成立については別の説もある。もともとこうした民間語源学はおもしろいけれど、深入りしても別に収穫は無からう。

(118) 軍隊を率いて進む公 訳注80参照。

(119) あの名高いバルミラの女性 シリアとメソポタミア間の交易で大いに栄えたオアシス都市バルミラの権力者オタエナトウスの妻ゼノビア。二六七年夫が甥に殺されると、息子ウアラダトウスのために統治権を掌握、勢力をローマ帝国の東方属領シリア、エジプトにまで拡張、ササン朝ペルシアとも互角の戦いに終始した。二七〇年アウグスタ（女帝）を名乗る。やがて帝国内の内乱を処理した皇帝アウレリアヌス治下のローマ帝国と衝突、二七二年に敗北、首都バルミラを占領され、凱旋式のためローマに連行される。のちある元老院議員と結婚、ローマで生涯を終わる。ギボン『ローマ帝国衰亡史』（第十一章）によれば、ゼノビアはラテン語、ギリシア語、シリア語、エジプト語に通じ、ホメロス、プラトンにも造詣深く、また美貌であり、更に夫とともに狩猟にも興じ、軍の先頭にも立った、と言う。

(120) ドイツで最も輝かしい宮廷 ボヘミアがドイツのうちに入れられているのは現代ヨーロッパ人には抵抗があるであろう。ハプスブルク家嫌いのチェコ人にとってはもちろんである。しかし、ボヘミア王国が実際にまだ（ドイツ民族の）神聖ローマ帝国の一部だった十八世紀のムゼーウスのような人士、少なくともドイツ人には、当然な感覚だったわけだし、神聖ローマ帝国が消滅（一八〇六）しても相変わらずオーストリア帝国の支配下にあった十九世紀でもこれは常識だった。たとえばシレジアの文人アイヒェンドルフ男爵ヨーゼフ（二七八―一八五七）は、その

『日記』(Tagbuch)にレーゲンスブルクの名高い石の橋を、ドイツ三大名橋、と記し、ブラハの橋(カレル橋、約五二〇メートル)は最も長く、ドレスデンの橋は最も美しく、レーゲンスブルクのそれは最も頑丈だ、と注している。また、オーストリアの劇作家イグナーツ・フランツ・カステリ(一七八一—一八六二)は、ブラハをとりわけ人目を惹く女性に譬えている(『ドイツへの旅』Reise nach Deutschland)が、これも文脈から言ってドイツの都市としての扱いにおいてである。

(121) 城下町 ヴィンシェフラトのこと。

(122) プラーフ Pfaff. この都市名起源説は有名。

(123) 関 Schwelle. しかし、ある時代「プラーフ」は「鴨居」を指したそう。『黄金のブラハ』(訳注101参照)ではこの点で極めて貴重な指摘がなされている。コスマスの『年代記』(解題参照)では、「低いプラーフのもとでは大きな男たちも身を屈める」とある由。つまり、「ブラハの栄光に対して人人が敬意を抱き、頭を下げるようになるだろう」(前掲書)と示唆しているのだ、とのこと。その後ムゼーウスの誤訳がドイツ語圏全体に広まって、ブラハ関起源説となったようだ。

(124) ……ドゥブラヴィウス 原文ラテン語。なお()内は訳者の補遺。

(125) ……ドゥブラヴィウス 原文ラテン語。

(126) ローマ皇帝にして……との特権が付与された、と 原文ラテン語。

解題

ボヘミアというラテン語名称は、ローマの歴史家タキトゥスによれば、紀元前一世紀に至るまでここに居住していたケルト人の一派ボイエル族に由来する、とのこと。彼らに続いてゲルマン人のマルコマンニ族が、のちには他のゲルマン系部族が入った。八世紀になって漸くスラヴ系の諸部族がドイツ人が入植していた地域に移住、その結果二つの民族が混在するようになった。

九世紀に大モラヴィア王国(八三〇年頃成立。モイミール一世が南東・中部モラヴィアおよび西スロヴァキアを統一して創始)に帰属。これが十世紀にマジヤール人に攻められて滅びると、ドイツの封主権を承認する形で自主独立

した。なお、西スロヴァキアはマジヤールに占有され、以後ハンガリアによるスロヴァキア支配は、第一次世界大戦後の中欧諸国の領土再編に至るまで、実に一千年に及ぶことになる。

最初のボヘミアの君主の系統はプシエミスル朝である。つまりボヘミアに割拠して争い合っていた諸部族をプシエミスル家が統一した。

伝承でプシエミスル朝最初の国君妃とされるリブシエに纏わる物語は、プラハのコスマス *Cosmas* (一一二五没) の『年代記』で初めて周知の形を取るようになった。また、ドゥブラヴィウスその他にもよってドイツ語圏、イタリア、イスパニアなどにも広まった。けれども、ドイツのクレメンス・ブレンターノの戯曲『プラークの創設』 *Clemens Brentano: Die Gründung von Prag* (一一一五)、およびオーストリアのフランツ・グリルパルツァーの戯曲『リブッサ』 *Franz Grillparzer: Libussa* (一一一九年以降の執筆。一八七二年刊行) の題材はムゼーウスから採られた、と言う。このムゼーウスの物語の題名を『リブッサ』のままにしようか、『リブシエ』としようか、随分迷ったが、結局ドイツ語圏での彼女の伝承伝播に貢献したらしいムゼーウスの表記に敬意を表すことにした次第。

チェコの有名な作曲家スメタナにはオペラ『リブシエ』がある。

後期印象派のオーストリアの画家グスタフ・クリムトは眼光炯炯たる厳かな風貌の、いかにも巫女らしい女性として『リブッサ』を描いた。

プラハのヴィシエフラト公園には、左手を上げて立つリブシエとその傍らに座るプシエミスルの像がある。これはミスルベクの彫刻「プシエミスルとリブシエ」。

史実では、プシエミスル朝出身の最初のキリスト教徒統治者で、おそらくプラハの砦を築いた(八八〇頃?)のはボジヴォイ公(在位八五〇―八九五)であろうか。その息子の一人ブラティスラフ公(一世)の長子であるキリスト

教徒のヴァーツラフ公（一世。在位九二四—九二九／九三五。後世ボヘミアの守護聖人聖ヴァーツラフとされる）は積極的にキリスト教を受容、布教を支援したが、これに反対する弟の異教徒ボレスラフ（もつともこちらも後にキリスト教に改宗）と彼を支持する貴族たちによって暗殺される。

その後ボレスラフ公（一世。在位九二九／九三五—九六七／九七二）はマジャール人の進出を阻止するためドイツ人の力を借りようと、ドイツ王オットー一世（初代神聖ローマ帝国皇帝。オットー大帝）に九六二年臣従を誓い、貢納の義務を負う。

ボレスラフ一世の息子ボレスラフ二世（在位九六七／九七二—九九九）の下で九七三年ブラハに独自の司教座が設けられ、マクデブルクのベネディクト会士ティートマーが初代司教に就任。

二世の息子ボレスラフ三世（在位九九九—一〇〇二／一〇〇三）の後ボヘミア公国は暫くポーランドの支配下（二〇〇三—二一九）に陥る。しかし、ポーランド勢力は神聖ローマ帝国皇帝ハインリヒ二世によって駆逐される。

続く君主たち、特にプジエティスラフ一世（在位一〇三四—一〇五五）の下でボヘミアにとって一応栄光の時代が始まる。モラヴィアが取り返され、ポーランドと戦って勝利も収める。しかし、ドイツの羈絆きはんから脱しようとする試みは失敗に終わり、一〇四一年ドイツ王ハインリヒ三世に破れ、同年に締結された平和条約はボヘミアとモラヴィアをドイツに極めて緊密に結び付ける。プジエティスラフ一世はその死（一〇五五）の直前、息子たちに相続所領を分割しようと企てたので、その死後息子たちの間に紛争が起こり、この混乱はほとんど半世紀続く。一〇八五年ボヘミア公ブラティスラフ二世（在位一〇六一—一〇八五）は神聖ローマ帝国皇帝ハインリヒ四世への貢献が認められ、初代ボヘミア王（在位一〇八五—一〇九二）に封じられる。

ブラティスラフ二世の孫ブラティスラフ二世（公としての在位一一四〇—一一五八。王としての在位一一五八—

一一七三)の弟息子プシエミスル・オタカール一世は神聖ローマ帝国皇帝ハインリヒ六世から一一九二年ボヘミア公(在位一一九二—一九三、一一九七—一二〇五)に封じられ、一一九七年漸く政權の座に就く。一一九八年ボヘミア王(在位一一九八—一二〇五—一二三〇)。

その息子ヴァーツラフ一世(在位一二二八—一二五三)もボヘミア王(一二三〇戴冠)。平和を愛したが、さまざま戦争に巻き込まれる。息子プシエミスル・オタカール(二世)との抗争もその一つ。

ボヘミア王としては五代目、プシエミスル朝で最も強力な統治者だったプシエミスル・オタカール二世(在位一二五三—一二七八)の下、ボヘミアはオーストリアおよびシユタイアーマルクを統合することによってドイツの諸領邦のような大国の地位を得たが、やがてオタカールはドイツ王ルドルフ一世に叛旗を翻し、一二七八年モラーヴァ(ドイツ語マルヒ)河平野における会戦で敗死、政治的勃興は恐ろしい反動を蒙った。

プシエミスル朝は一二〇六年、ヴァーツラフ二世(在位一二八三—一三〇五)の息子ヴァーツラフ三世(在位一三〇五—一三〇六)がオロモウツで暗殺されて遂に断絶する。

一三一〇年ドイツ王ハインリヒ七世は王子ヨーハンがヴァーツラフ二世の末娘エリシユカと結婚したことでボヘミアを獲得、ヨーハンをボヘミア王(在位一三一〇—一三四六。ボヘミア王としてはヤン)に封じる。ルクセンブルク朝の始まりである。ただしヨーハンはボヘミアに地歩を占めることはできず、晩年は大抵国外で過ごした。

その長男ドイツ王(一三四六以降)カール四世(一三一六—一三七八)は名実ともにボヘミア王となる。ボヘミア王としてはカレル一世(在位一三四六—一三七八)である。彼はプラハで生を享け、フランスの宮廷で育てられ、一三三三年プラハに戻り、モラヴィア辺境伯として、父の代理で統治した。一三四六年ボヘミア王に即位。選帝侯五人に支持され、一三五五年神聖ローマ帝国皇帝に戴冠。ボヘミアの農業、鉱山、交易、運輸を振興、国力を充実させ

るとともに文化的にも向上を図った。プラハに大司教座を設け、またパリ大学の範に倣いプラハに中欧最初の大学（カレル大学。カロリヌム）を二三四八年創設。ウィーン大学（一三六五創設）、ハイデルベルク大学（一三八六創設）より古い。プラハ城（九世紀半ば以来ヴルタヴァ河左岸の小高いフラチャヌイの丘の上にあり、河を隔てて東側のプラハ旧市街、新市街を見下ろす）とフラチャヌイ城の連結した今日の姿の大要塞、新市街、カレル橋（カルルーフ・モスト）が建設されたのもこの王の治世下である。従って今日のプラハの基礎はほぼカレル一世が築いた、と言つてよからう。プラハとボヘミア王国の黄金時代である。一三四七年以降黒死病ペストが繰り返しヨーロッパを襲つてはいたが。カレル一世はプラハで死去。

しかし、ドイツ系の王家と地付きのボヘミア人との蜜月はその息子の代に既に徹底的に破綻する。カール四世（カレル一世）の長子ヴェンツェル（一三六一—一四一九）は十五歳で既にドイツ王・ローマ王、父の死後ボヘミア王（在位一三七八一—一四一九）となる。ボヘミア王としてはヴァーツラフ四世。酒癖が悪く、乱暴なこの王はボヘミア貴族および聖職者と抗争、一三九三年総司教代理ヤン・ネボムツキー、すなわちネボムククのヤン（一三三〇—一三四〇?）——一三九三）を、「教皇使節の教皇への書簡によれば」公衆の面前で通りから通りへと引き回した挙句、両手を後ろ手に縛り、両足と頭を車輪のように括りつけ、カレル橋からヴルタヴァ河に突き落として溺死させた、とのこと。一三九三年三月二十日の夜のことである。プラハ大司教の支持者だったためらしいが、一四五〇年頃登場した伝説によつて初めて、王妃ソフィアの告解の秘密を明かせ、との酔った王の強要をあくまでも拒んだため、一三八三年四月二十九日溺死させられた、ということになった。その後聖ヤン・ネボムツキーはボヘミアの守護聖人（橋の守護聖人としてドイツ語圏でも尊崇されて来た。聖ヨハンネス・ネボムク）とされ、カレル橋を飾る三十の彫像の最初の一つでもある。ヴァーツラフは一三九四年暴虐な支配に憤激した貴族たちに襲われ、数箇月間オーストリ

アのヴェルトベルク城に監禁され（伝説によれば、彼はある献身的な少女の助けによりプラハ城から逃げ出した、と言う）、ボヘミアでの本質的な主権を諦め、一四〇〇年にはドイツ王・ローマ王としても四人の選帝侯によって退位させられた。もつとも、一三七八年から一四一七年まで二人の教皇が並立する「教会大分裂」、また、カレル大学の総長ヤン・フスのコンスタンツ公会議での火刑判決と執行、それに続くフス派の叛乱という厄介な問題もあり、ヴァーツラフ四世ばかりを内政混乱の責任者にできないかも知れない。

次のドイツ王、ボヘミア王、のちの神聖ローマ帝国皇帝はジークムント。ボヘミア王としてはジギスムント（在位一四二〇、一四三六―一四三七）。ルクセンブルク朝ボヘミア王国は彼の死とともに断絶。

この後フス派の貴族イジーがボヘミア王に選出される。次はポーランド王家ヤゲウォ朝出身のヴラディスラフ五世（二世）（在位一四七一―一五一六）。彼はハンガリア王でもあった。その後彼の息子ルドヴィク（在位一五一六―一五二六）が継ぐ。十歳で即位。ハンガリア王でもあった。神聖ローマ帝国皇帝カール五世の妹マリアと結婚しているが、若く、また気が弱かったため、国内の無政府状態を收拾することができなかった。一五二六年八月二十九日彼の率いるポーランド、ハンガリア、ボヘミア連合軍はドナウ河畔モハーチ（ハンガリアとクロアチアの国境付近のハンガリア側）の会戦で、オスマントルコの名君スレイマン一世が指揮するトルコ軍に壊滅させられ、敗走中に溺死。

彼の姉アンナの夫オーストリア大公フェルディナント一世（後神聖ローマ帝国皇帝。戴冠一五五六）が、一五二六年十月二十三日ボヘミア王（在位一五二六―一五六四）に選挙され、かくしてハプスブルク朝ボヘミア王国が始まる。フェルディナントはその妻を通じてハンガリアの王位継承権も持ったため、彼によって、時時ちよつと中断されはしたが一九一八年まで続くオーストリア、ボヘミア、ハンガリアというこの近隣三国の統合が始まるのである。しかしルター派の新教徒が多数を占めるボヘミアと厳格なカトリック教徒である王家との対立はこの国の統治を困難なもの

にし、新教を奉じるボヘミア貴族の叛乱が神聖ローマ帝国皇帝フェルディナント二世に徹底的に打ちのめされた（二六二〇年十一月八日の白^{ビラー・ホラ}山の戦い）ことにより、ボヘミアの栄光は十七世紀に完全に失われた。

ボヘミア王国はオーストリア＝ハンガリア二重帝国＝王国の一部として名称上は第一次世界大戦終了時まで存在した。しかし民族としてのチェコ人はハプスブルク家に象徴される民族としてのドイツ人の支配に不満を鬱積させており、オーストリアに対する忠誠心は無かった、としてよからう。第一次世界大戦の折は、ロシアとの戦いに動員されても同じ斯拉ヴ人であるロシア側に捕虜にされると、チェコ軍団を組織して、ロシア側で戦った兵たちもいる。チエコの作家ヤロスラフ・ハシエクの『世界戦争における善良な兵士シユヴェイクのさまざまの体験』（邦訳としては、栗栖継訳『兵士シユヴェイクの冒険』全四巻。岩波文庫、一九七二年）の主人公シユヴェイクの言動にはチエコ人の面目躍如たるものがある。

けれどもいわゆるハプスブルク帝国、つまりハプスブルク朝神聖ローマ帝国の一部としてその域内の文化・文明の交流に浴し続けることができたため、ボヘミアおよびモラヴィアは先進地域として繁栄し、今日も豊かな工業資源、高度な技術水準に支えられ、強い経済力を誇っているし、文化の各分野で畏敬すべき業績を挙げている。

なお訳注でも、この解題でも、「チエコ王国」（参考にして戴いた石川達夫氏著『黄金のプラハ』ではこう書かれている）という名称は一切使わなかったが、もし、そうした呼称を用いるとすれば、それはボヘミア王国、モラヴィア、モラヴィア、シレジア公国、および両ラウズイツの四つの領邦を合わせたもの、すなわちボヘミアの王冠の下に統治された領域を示す。

モラヴィアはボヘミアとともに現チエコ共和国を形成している。ボヘミアと西部を、スロヴァキアと南東部を、下オーストリアと南部を、ポーランドのシレジアと北部を接する。面積およそ二万二千平方キロ。

なお、武蔵大学人文学部ヨーロッパ比較文化学科の同僚で、新進気鋭の中欧研究者である阿部賢一専任講師には、チエコ語の発音表記に始まり多数のご教示を受けた。末筆ながらここに衷心から御礼申し上げます。もとより訳者の独り合点に因る誤りは多多あろうが、これは偏に訳者の責任に帰することは言うまでも無い。

参考文献

邦文（邦訳を含む）

- 石川達夫著『黄金のプラハ 幻想と現実の錬金術』（平凡社選書）、平凡社、二〇〇〇年
加藤雅彦著『ドナウ河紀行』（岩波新書、岩波書店、一九九一年
リデー、ジャック著・田中晃／板橋拓己訳『中欧論 ―帝国からEUへ』（文庫クセジュ）、白水社、二〇〇四年

欧文

- Demetz, Peter: *Prague in Black and Gold. Scenes From the Life of a European City*. Hill and Wang, New York 1997.
Hoensch, Jörg K.: *Geschichte Böhmens. Von der slavischen Landnahme bis ins 20. Jahrhundert*. C. H. Beck, München 1987.
Melchers, Erna und Hans: *Das große Buch der Heiligen. Geschichte und Legende im Jahreslauf*. Südwest Verlag, München 1978.